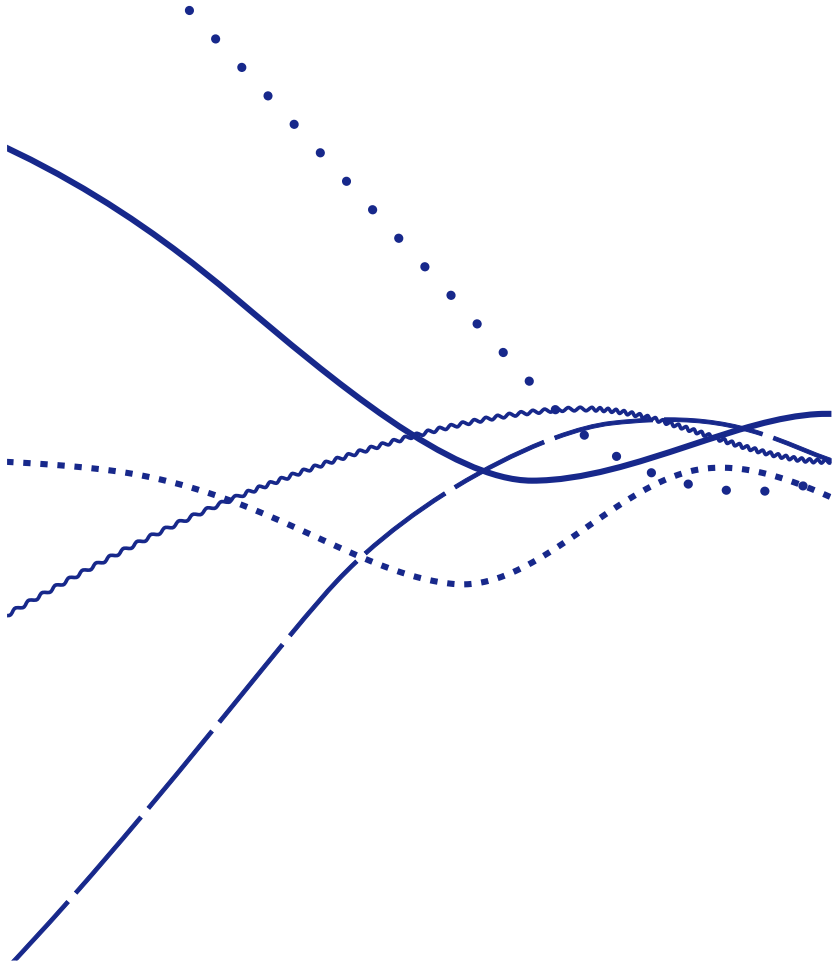
tarl TOKYO ART RESEARCH LAB

思考と技術と対話の学校



2017 ANNUAL REPORT

Tokyo Art Research Lab
思考と技術と対話の学校 2017
アニュアルレポート

02 「紡ぐ人」になる　森司

03 「思考と技術と対話の学校」とは

06 アートプロジェクトを紡ぐためのアプローチ

08 2017年度実施概要
言葉を紡ぐ　体験を紡ぐ　技術を深める
アートプロジェクトの今を共有する

Course 1

10 言葉を紡ぐ
12 講座の流れ
19 受講生インタビュー

Course 2

20 体験を紡ぐ
22 講座の流れ
29 受講生インタビュー

Course 3

30 技術を深める

Course 4

34 アートプロジェクトの今を共有する

38 紡ぐことへの挑戦　坂本有理

40 プロフィール一覧

42 Tokyo Art Research Lab（TARL）とは

「紡ぐ人」になる

2018年1月、約7ヶ月にわたる連続講座修了日に、受講生の最終プレゼンテーションを聞いた。アートを語る言葉を持たなかった人が、アートを語る言葉を学び、文脈を知り、それらを紡ぎ、ひとつの世界を人前で語る。自らの言葉で他者に向け、アートプロジェクトに関して発語する難しさと格闘する受講生。しかし、言葉や体験を紡ぐ人になる難しさを感じもさせる。想いを上手く言葉にできないもやもやしたものを抱えていた、昔の自分を見ている気がした。思わず昔と書いたのだが、「初めまして」の出会いの多いアートプロジェクトの現場では、自分の言葉に変換し語り切る難しさを、今もときどきに経験する。それでも判断を保留する方法を知り、その状態を楽しむ術をも知った今は、それはそれで未知なるものとの出会いとして、尽きぬ楽しさを味わいもする。

「紡ぐ」行為を学ぶ過程では、場数と呼ぶべきヒリッとした経験が求められることだろう。語るべき対象を捉え、調べ、準備をすることは難しくない。学び難いのは自らのアート観を決め、評定の指標を身体化することだ。その上に個性としてのカラー、スタイルが乗る。そのような語りは、ひとつの表現行為である。他者の言葉をなぞる解説ではなく、自らの力で語るべきポイントを選び出し、魅力を伝える語りを構築する。「紡ぐ人」は、アートプロジェクトに従事する人材の新たな職能なのだ。アートプロジェクトの現場では、未だ見ぬサービスの提供が待たれている。「する人」から「紡ぐ人」へのバトンのリレーが当たり前になることで、作品を前に戸惑い立ちすくむ人や足早に通り過ぎてしまう人が、アートとの出会いを豊かな体験として持ち帰れるようになる。

「紡ぐ」講座は、これまでの事務局を担う人材育成の経験を活かし、アートプロジェクトのPDCAサイクルを廻す実施者と同じレベルのアートの知識や体験を持つ人材像をゴールとする。研鑽を続け、自分自身が納得の行く、紡ぐスタイルの確立を目指してもらえたらと思う。

森 司
思考と技術と対話の学校　校長

「思考と技術と対話の学校」とは

「思考と技術と対話の学校」は、アートプロジェクトを
「紡ぐ力」と「動かす力」を身体化するためのスクールプログラム。
社会的な課題を「思考」し、アートプロジェクトの現場をつくるための「技術」を磨き、
問題意識を共有するメンバーと「対話」しながら学ぶことができる場です。

近年、日本各地で多くのアートプロジェクトが展開されるようになりました。
時代や社会に向き合い、複数の人たちが協働するアートプロジェクト。
その魅力や価値を、言葉や体験によって「紡ぐ力」は、アートと社会を接続する力であると言えます。
アートプロジェクト運営の現場では、プロジェクトの目的や内容を伝えるために、
言葉や、観客の体験を「紡ぐ」技術が様々な局面で求められています。
特に2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機に、多くの人々が訪れるであろう東京において、
そのような人材は、人々のより豊かな出会いや関係性を生み出す存在として期待されるでしょう。

本校ではこのような現状に向き合いながら、2017年度はアートプロジェクトの魅力を伝える
“紡ぐ人”の育成を柱とした連続講座を中心に展開しました。
本アニュアルでは、今年度開講した各講座における受講生の学びを振り返ります。

「思考と技術と対話の学校」の変遷

2014年　「思考と技術と対話の学校」開校
アートプロジェクトを「動かす」ために必要な「思考」「技術」「対話」の基礎を
3年間かけて育む「基礎プログラム」を中心に始動
基礎プログラム1「思考編」開講

2015年　「思考編」に加え、基礎プログラム2「技術編」開講

2016年　「思考編」「技術編」に加え、基礎プログラム3「対話編」開講

2017年　アートプロジェクトを社会とつなぐ「紡ぐ力」を身につける
連続講座「言葉を紡ぐ」「体験を紡ぐ」を新たな柱として展開
運営技術を磨く「技術を深める」や、最新事例に触れる
「アートプロジェクトの今を共有する」公開講座も開講

「思考と技術と対話の学校」が目指す人材像

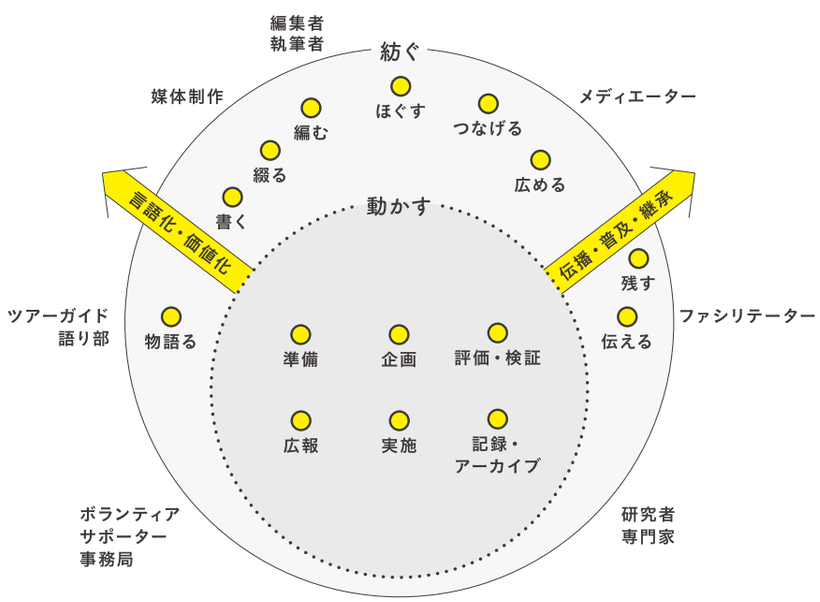
「紡ぐ人」と「動かす人」

本校ではこれからアートプロジェクトに関わりたい方、
現場で活躍しながら次のステップに進みたい方を対象に、
「紡ぐ人」と「動かす人」を育成するための講座を開いています。
アートプロジェクトを取り巻く様々な役割の中で、
「紡ぐ人」と「動かす人」は具体的にはどのような活動をしているのでしょうか。
アートプロジェクトを「動かす」事務局やボランティア、サポーター、
そしてその活動を「伝える」媒体を生み出す編集者、ツアーガイドのコーディネーターや語り部、
またワークショップなどの普及プログラムのファシリテーターや、
アートプロジェクトを広めるメディエーターなど——。
アートプロジェクトの周りには「紡ぐ人」と「動かす人」の様々な可能性が広がっています。

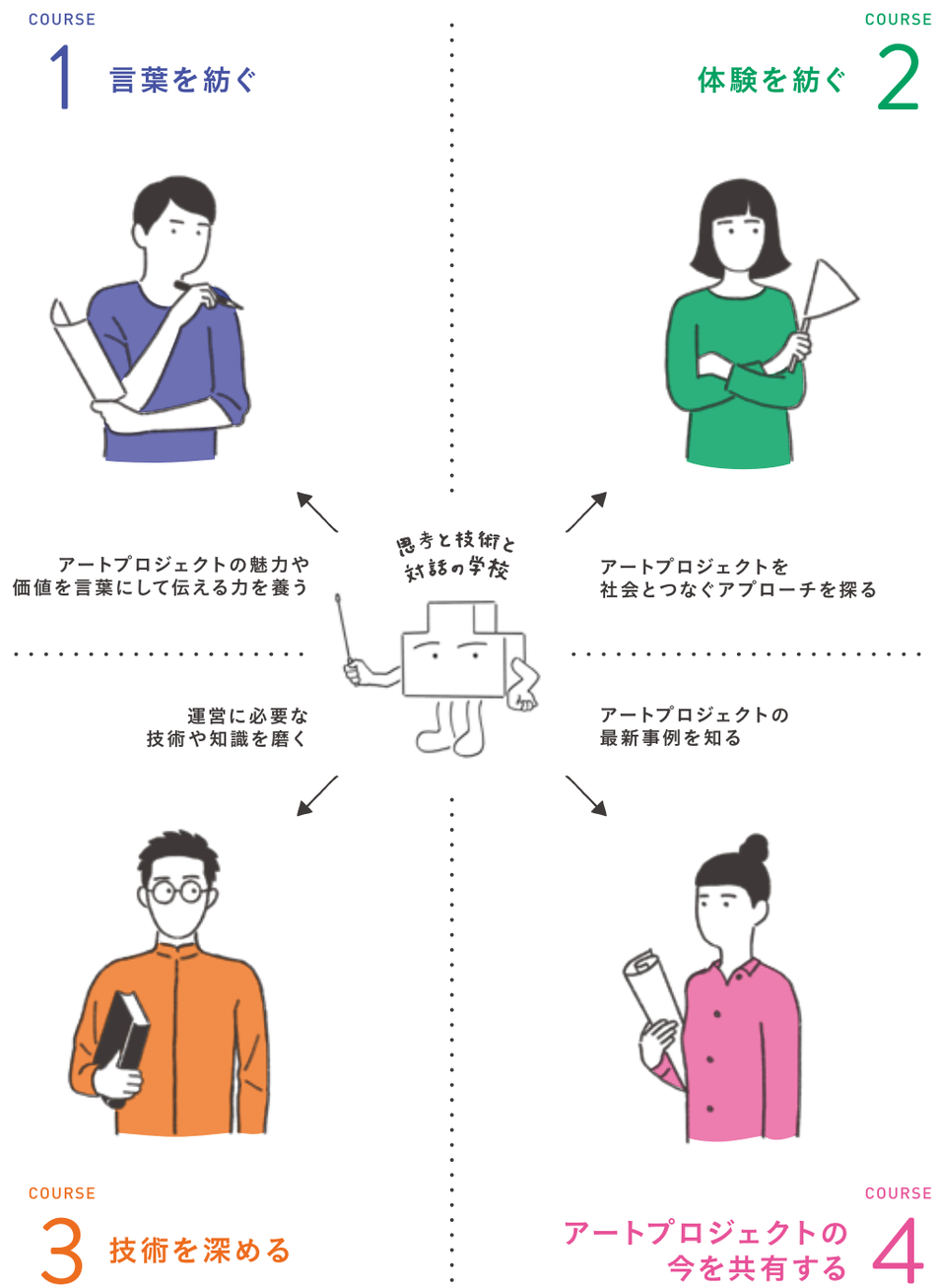
アートプロジェクトを動かし、伝えるための役割／人材像

紡ぐ人　アートプロジェクトの意義や価値を言葉にし、語り伝える人
様々な方法で広めたり、人や活動をつなげたり、社会化する人

動かす人　アートプロジェクトの運営を担う人



2017年度の講座



アートプロジェクトを紡ぐためのアプローチ

—「インプット」と「アウトプット」の先にあるもの—

本校では、様々な現場で課題になっているアートプロジェクトの価値化・継承・普及を見据えて、紡ぐためのアプローチを意識したプログラムを提供しています。講座を通したインプット、アウトプットを重ねることで、アートプロジェクトがより豊かに 伝わる・つながる・残る・広まることを目指します。

INPUT 紡ぐために必要な準備運動

伝えるために様々なことを吸収する

読む
［書籍、資料など］

考える／捉える
［アートプロジェクトの意義や課題など］

観る／鑑賞する
［アートプロジェクト、展覧会、公演、イベントなど］

学ぶ／知る
［研究、リサーチなど］

聞く
［周辺の人々の話など］

体験する
［アートプロジェクトの運営やボランティアなど］

OUTPUT アートプロジェクトを言葉にして伝える

取り込んだものをベースに外へ出す

書く
［記事、レポート、本、広報物など］

対話する
［他者との意見の交換、共有］

話す
［語り、トークプログラム、プレゼンテーションなど］

企画を構想する
［ツアーガイド、場づくりなど］

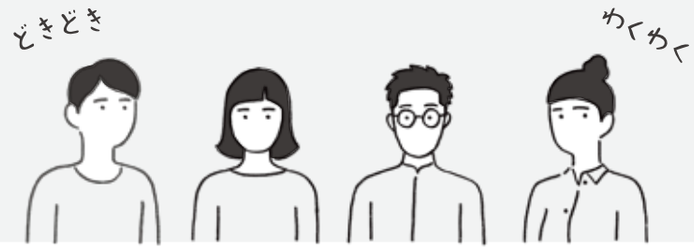
OUTPUTの先に…

価値化

普及　継承

［伝わる　つながる　残る　広まる］

2017年度実施概要



連続／通年

言葉を紡ぐ

アートプロジェクトを言葉にして伝える

第一線で活躍するゲストによるレクチャーやテキスト執筆などの実践を通し、アートプロジェクトを言葉にして伝える術を磨く講座です。様々な語り口や文章に触れることで、技術を磨き、表現方法の幅を広げます。プロのライター・編集者による技術指導も実施します。

日程　2017年7月8日（ガイダンス）〜2018年1月20日（全11回・すべて土曜日）10:15〜17:00
対象　これからアートプロジェクトに関わろうとしている人・すでに現場経験はあるけれど「言葉にする力」を養いたい人
料金　一般：60,000円　学生：40,000円
募集人数　30名程度

→ P.10-19

連続／通年

体験を紡ぐ

アートプロジェクトを社会とつなぐ

アートプロジェクトの現場やゲストと連携し、作品の魅力を伝えるガイドツアーやトークプログラム、活動を伝えるための媒体制作や場づくりに取り組む講座です。アートプロジェクトのあり様を多角的に捉えながら、社会との接点を提示するための視点を養い、可能性を探ります。

日程　2017年7月8日（ガイダンス）〜2018年1月13日（全14回・すべて土曜日）10:15〜17:00
対象　アートプロジェクトの現場にすでに関わっており、自らの専門分野として言葉や体験を「紡ぐ力」を磨きたい人
料金　一般：60,000円　学生：40,000円
募集人数　15名程度

→ P.20-29

単発／公開講座

技術を深める

運営に必要な技術や知識を養う

アートプロジェクトを運営する現場で必要となる技術や知識を身につけるための講座です（全4回）。広報やPRに求められる視点やリスクマネジメント、記録方法などについて、ワーク形式の実践も交え、現場を動かしている多彩なゲストによるレクチャーを実施します。

日程　2017年10月3日、11月21日、2018年2月7日、2月21日（全4回）19:00〜21:30
対象　アートプロジェクトの事務局運営を担う人／技術をさらに磨きたい人
料金　一般1,500円（連続講座受講生は1,000円）
募集人数　各回30名

→ P.30-33

単発／公開講座

アートプロジェクトの今を共有する

アートプロジェクトの最新事例を知る

アートプロジェクトの最新事例を知りネットワークを広げる講座です（全4回）。開館したばかりのアートスペースや2017年度に開催された様々な芸術祭に携わった方などをゲストに迎え、事務局運営の裏側や現場での工夫を伺うほか、参加者による活動を共有し、ネットワークを広げていく試みも実施します。

日程　2017年9月15日、10月12日、12月22日、2018年2月15日（全4回）19:30〜21:00
対象　アートプロジェクトの現場との情報交換をしたり、ネットワークをつくったりしたい人
料金　無料
募集人数　各回30名

→ P.34-37

メイン会場：ROOM302（東京都千代田区外神田6-11-14-302 3331 Arts Chiyoda 3F）

Course 1

言葉を紡ぐ

アートプロジェクトを言葉で
他者に伝えるための力を養う講座「言葉を紡ぐ」。
多彩なゲストによるレクチャーや課題提出、
エディターによる文章添削、フィールドワークなどを通し、
文章作成やプレゼンテーションの技術を養います。

言葉で「紡ぐ」ために
必要な視点や技術を養います

「言葉を紡ぐ」ためのステップと授業内容

step 1 アートプロジェクトを捉える
7月〜8月

アーティスト、事務局スタッフ、美術史家など立場の異なるゲストの言葉を通してアートプロジェクトへの理解を深めると共に、言葉にする目的や意義についても様々なあり方があることを知る。

step 2 現場を体験する
9月〜11月

横浜創造界隈や〈黄金町バザール〉を巡るガイドツアー、〈TERATOTERA祭り〉のフィールドワーク、ボランティア体験やレポート課題などを通して、言語化されにくい現場の様子を体験・共有する。

step 3 立場と伝え方を知る
9月〜10月

芸術祭やアートプロジェクトにおける「伝える」取り組みや事例に触れ、自らが紡ぐ際の立場や手法について考える。

step 4 見方と書き方を知る
9月〜10月

アートプロジェクトを伝える様々な媒体や記事を読み解く、ウェブ媒体の編集企画を考えるなどして、紡ぐ際の立場や手法についてさらに考えを深める。

step 5 紡ぐための言語に触れる
12月

ディレクター、アーティストそれぞれが、自らが生み出すアートプロジェクトをどのように言葉にしているのかを知る。また、彼らとの対話を通して理解を深める体験をする。

step 6 言葉を紡ぐ実践
12月〜1月

伝えたいアートプロジェクトや伝える対象を設定し、伝えるためのメディアやコンテンツを構想する。スクールマネージャー（スクマネ）、エディターからの指導を受けて文章に磨きをかける。

受講生を支える充実したサポート体制

多彩なゲスト陣

編集者やドラマトゥルク、写真家、美術史家、事務局マネージャーなど第一線で活躍するゲストによるレクチャー。

エディターによる文章指導

課題を通して書く際のクセや魅力を知る。より伝わるテキストにするため、プロのエディターが直接、指導。

スクールマネージャーのサポート

3名のスクールマネージャーが、授業のポイントや予習・課題作成のための情報提供などを丁寧にサポート。

7/8

AM

ガイダンス

PM

アートプロジェクトを「紡ぐ」

〈混浴温泉世界〉、
〈国東半島芸術祭〉(大分)の体験型ツアー

〈醤の郷＋坂手港プロジェクト〉
(瀬戸内)のメディア展開

かじこ(岡山)、たみ(鳥取)の場づくり

GUEST

多田智美
Tomomi Tada
(編集者／株式会社MUESUM代表)

松田雅代
Masayo Matsuda
(NPO法人BEPPU PROJECT
アートプロジェクト事業部 統括)

三宅航太郎
Kotaro Miyake
(うかぶLLC 共同代表)

・アートマネージャー、編集者、アーティストそれぞれの実践例からアートプロジェクトの多様性を知ると共に、「紡ぐ」ことの意義について考える

課題 **レポート1** (800字)

ゲストの話を聞いて気づいたこと、考えたこと

課題に対するフィードバック

話の理解度を確認。不足や誤解があれば情報を補足する。疑問があれば回答例を対話的に伝える

7/22

紡ぐための言葉を養う

AM

〈さいたまトリエンナーレ 2016〉
《←(やじるし)》の企画意図

GUEST

長島確
Kaku Nagashima
(ドラマトゥルク／翻訳家)

PM

《←(やじるし)》の
制作プロセスと協働者の視点

GUEST

川瀬一絵
Kazue Kawase
(写真家)

長島確
Kaku Nagashima
(ドラマトゥルク／翻訳家)

・アートプロジェクトのアウトプットやプロセス、仕掛け手の意図などについて、事例を通して知る
・仕掛け手と写真家というそれぞれの立場から語られる言葉を通して、外からは見えないクリエイションのプロセスに触れる

課題 **レポート2** (1200字)

「アートプロジェクトとは何か」を自分なりの考えと言葉で文章化して説明する
※受講生および、スクールマネージャーに読んでもらう設定

課題に対するフィードバック

アートプロジェクトへの理解度に応じて、より思考を深めたり、表現を工夫したりしてもらいたい部分を指摘

8/5

「伝える」を考える

AM

アーティストの考える
アートプロジェクトとその紡ぎ方

GUEST

佐藤悠
Yu Sato
(騙り部／ゴロゴロ茀平代表／
御嘶屋家元／知ったかアート大学学長)

PM

体験型作品《いちまいばなし》
実演とその演出について

GUEST

佐藤悠
Yu Sato
(騙り部／ゴロゴロ茀平代表／
御嘶屋家元／知ったかアート大学学長)

・発話や対話によるアートプロジェクトの伝え方の可能性と奥深さを知る
・アーティストの立場から語られる言葉を通して、アートプロジェクトの語り口の例を知る

課題 **予習**

〈大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ〉関連の報告書、新聞・雑誌などの報道記事、批評家やディレクターによるテキストを読む

8/26

歴史を辿る、言葉を捉える

AM

1950年代からアートプロジェクトを
巡る歴史を捉える

GUEST

加治屋健司
Kenji Kajiya
(美術史家／
東京大学大学院総合文化研究科准教授)

PM

アートプロジェクトの言葉：
〈大地の芸術祭 越後妻有
アートトリエンナーレ〉を例に

アートプロジェクトの言葉：
〈取手アートプロジェクト〉を例に

GUEST

加治屋健司
Kenji Kajiya
(美術史家／
東京大学大学院総合文化研究科准教授)

羽原康恵
Yasue Habara
(アートコーディネーター／
取手アートプロジェクトオフィス理事・事務局長)

・アートプロジェクトという言葉の成り立ちを、歴史的文脈から理解する
・テキスト執筆の基本的なリテラシーを身につける
・美術史家という立場から語られる言葉など、様々な語り口や言葉を知る
・〈取手アートプロジェクト〉がどのように語られてきたのかをその成り立ちと共に知る

レポート1 → レポート2 → 予習 → 中間課題1 執筆

Column アートプロジェクトを捉える

アートプロジェクトを伝えるためには、まず、各々の視点からアートプロジェクトを捉える必要がある。準備運動として、具体的な事例と向き合い、思考を耕すことから授業が始まった。《← (やじるし) 》の制作プロセスを聞いた後のグループディスカッションでは、まだまだ捉えきれないもやもやした思いや意見の違いに戸惑いながらも、「市民参加」「地域との関わり」「プロセスの重視」など、いくつものキーワードが浮かび上がった。その他にも、日本美術史から歴史を概観する、芸術祭やアートプロジェクトに関する記事を媒体別に読み解く、授業の感想を言葉にしてみるなど、アートプロジェクトを伝える様々な言葉に浸る時間を提供した。(スクールマネージャー)

中間課題1

課題 **レポート** (2000字)

「横浜創造界隈におけるアートプロジェクト」をテーマに、特定の体験・リサーチなどを反映させた記事を制作
(9/2のフィールドワークの延長でも可)

課題に対するフィードバック

横浜創造界隈への興味や理解が正しく深まっているのかを確認し、より思考を深め、文章表現を工夫して欲しい部分を指摘した

狙い

フィールドワークや独自の取材・リサーチにより情報を得て、それを生かした文章表現に取り組む機会とした

9/2

現場を体験する

AM

横浜創造界隈を巡るツアー（馬車道エリア）

※場所：YCC ヨコハマ創造都市センターほか（神奈川県横浜市）

GUIDE

橋本誠
Makoto Hashimoto
（アートプロデューサー／一般社団法人 ノマドプロダクション 代表理事）

PM

横浜創造界隈を巡るツアー（〈黄金町バザール2017〉ほか）

※場所：黄金町 高架下スタジオSite-Dほか（神奈川県横浜市）

GUIDE

「体験を紡ぐ」受講生

・アートプロジェクトとまちの関わりを体験する
・ツアーガイドの「紡ぐ」視点を知る
・ディスカッションを通し、参加者による視点の違いを知る

課題 **レポート**（1200字）

アートプロジェクトの運営（可能な限り、イベント開催当日の運営）にボランティアとして関わり、その体験を反映させた記事を制作

課題に対するフィードバック

現場の理解度をふまえ、ポイントが押さえられていればさらなる情報を伝える。不足や誤解があれば補足する。疑問があれば回答例を対話的に伝える

狙い

アートプロジェクトを運営する立場の視点や、関わることでしか見えにくい現場の出来事を体験すると共に、言語化することで考えを整理する

中間課題2

9/16

立場と伝え方を知る　見方と書き方を知る

AM

アートプロジェクトを伝える仕事の幅と実践例

LECTURER

中田一会
Kazue Nakata
（アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー／コミュニケーション・デザイン担当）

坂本有理
Yuri Sakamoto
（アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー）

PM

地域をテーマにした「コロカル」式アートプロジェクトの伝え方

GUIDE

colocal

コロカル編集部
colocal
（マガジンハウス）

・アートプロジェクトを、どのような言葉や手法を用い伝えるかを知る
・内外の視点や職種・業態により異なる伝え方があることを知る
・取材記事をもとに、媒体編集の視点を知る

10/7

立場と伝え方を知る　見方と書き方を知る

AM

前半の授業の振り返り
個人面談

PM

〈瀬戸内国際芸術祭〉大島におけるガイドツアーの取り組み

GUEST

笹川尚子
Shoko Sasakawa
（特定非営利活動法人 瀬戸内こえびネットワーク）

・プロジェクトと地域の関わり方をどのように伝えているのかを知る
・アートプロジェクトを運営する立場の視点を知る

11/11

言葉を紡ぐ実践　現場を体験する

AM

中間課題をふまえたアートプロジェクトや文章表現に関するディスカッション
アートプロジェクトを伝える様々な記事・媒体の紹介

EDITOR

上條桂子
Keiko Kamijo
（編集者／ライター）

佐藤恵美
Emi Sato
（編集者／ライター）

PM

〈TERATOTERA祭り2017〉フィールドワーク

※場所：〈TERATOTERA祭り〉開催エリア（東京都三鷹市）

・中間課題を通して得られたアートプロジェクトに対する様々な視点や文章表現の課題を共有する
・〈TERATOTERA祭り2017〉の現場を体験しながら、作品を言語化するための手掛かりを見つける

課題 **コメントシート提出**

〈TERATOTERA祭り2017〉におけるプロジェクト全体のテーマと作品の関係性、観客の巻き込み方などについて考察・言語化する

課題に対するフィードバック

受講生やスクールマネージャーそれぞれが〈TERATOTERA祭り2017〉をどのように体験し、捉えたのかを言葉を通して共有することで多様な視点を提供した

中間課題1 執筆
中間課題2 執筆
→ 中間課題1 提出
→ 中間課題2 提出
修了課題テーマ検討・プロトタイプ提出

Column 現場を体験する

アートプロジェクト初体験の方も多い中、同じ受講生である「体験を紡ぐ」メンバーが企画したツアー体験には、よい意味での敷居の低さと他人事にできない緊張感があった。教室で話を聞く反応とは明らかに異なり、企画者にアテンドされてまちを歩くうちに、自分が何を感じ、何を考えたのか、自発的に受講生同士で話をしていた。寿町を歩いていた受講生が「なぜここには男性しかいないのか」とつぶやいた疑問に、ガイド役の受講生がヒントを出す。何かに気づいた彼女は、しばらく考え込んだ。体験したからこそ紡げる言葉がある。受講生たちの言葉に変化が見られた回で、これまでのゲストの話を自分なりに解釈して深める1日に。中間課題・修了課題に向けて、それぞれの視点の獲得につながる機会となった。（スクールマネージャー）

Column 立場と伝え方を知る、見方と書き方を知る

アーツカウンシル東京の2人によるレクチャーでは、立場によって異なる言葉の使い方について多角的に学んだ。「言葉とは練って練ってようやく出てくるもの」。まさに、この講座ならではの言葉の数々を聞くことができた。コロカル編集部の2人を迎えた回では、編集部員の立場になり企画書をプレゼンするワークショップも行い、編集の視点と、伝える相手を意識した上で企画を立てることの難しさ、大切さを実感した。〈瀬戸内国際芸術祭〉で大島のハンセン病の歴史とアートプロジェクトの関わりを伝えるガイドツアー企画の話では、繊細な事柄を扱うときの言葉の選び方や伝え方について具体的な質問が多数挙がり、ゲストの丁寧な立場の取り方に、伝え方を設計することの重要性に改めて気づかされた。（スクールマネージャー）

12/9

言葉を紡ぐ実践　紡ぐための言葉を知る

AM

修了課題の中間発表と
フィードバック

EDITOR

上條桂子
Keiko Kamijo
（編集者／ライター）

佐藤恵美
Emi Sato
（編集者／ライター）

PM

アーティスト自らが
生み出す言葉にふれる

GUEST

藤浩志
Hiroshi Fuji
（美術家／
秋田公立美術大学大学院教授・副学長）

- 修了課題提出に向けて進捗状況を発表、編集者の視点を借りながら課題の確認やブラッシュアップの方向性を共有する
- アーティストによるブログ記事を通し、自らの表現をどのように言語化しているのか知る

12/23

言葉を紡ぐ実践　紡ぐための言葉を知る

AM

修了課題の中間発表と
フィードバック

PM

〈TERATOTERA祭り2017〉
ディレクターが生み出す言葉にふれる

GUEST

小川希
Nozomu Ogawa
（TERATOTERA ディレクター／
Art Center Ongoing 代表）

- 〈TERATOTERA祭り2017〉ディレクターの言葉を通し、アーティストとの関わり方や企画意図、出品作品などについて知る
- 修了課題提出に向けて進捗状況を発表、課題の確認やブラッシュアップの方向性を共有する

修了課題制作

Column　紡ぐための言葉を知る

受講生が修了課題に向け格闘する中、藤浩志さんから世界と対峙する姿勢や思考を学んだ。かたちにならない「もやもや」や、折り合いの悪いものも大事に抱え続けたものが作品に変化し、新たな視点として生み落とされる。その過程を聞き、気づきが生まれた。回を重ねるごとに視野が深まり、言語化できない「もやもや」を消化不良気味の受講生にとって、大きな励ましとなった。

どんなアーティストと仕事をしたいかとの問いに、小川希さんは躊躇なく「最終的にいいやつであることが大事。じゃないと一緒に仕事はできない」と答えた。すべてを受け入れ対話を続けた彼の言葉は、鋭く刺さる。言葉を紡ぐ姿勢、アーティストに向き合う姿勢、自身の言葉への責任の取り方を学んだ。受講生の質問の精度も格段に上がり、学びの蓄積を大いに感じさせた。（スクールマネージャー）

2018.1/20

言葉を紡ぐ実践

AM

通年の授業の振り返り

修了課題の読み込みと
グループディスカッション

PM

修了課題の発表と講評／修了式

COMMENTATOR

多田智美
Tomomi Tada
（編集者／株式会社MUESUM代表）

森司
Tsukasa Mori
（アーツカウンシル東京 Tokyo Art Research Lab
ディレクター／東京アートポイント計画 ディレクター）

- 1年のプログラム内容のポイントを振り返りながら、身につけた学びを確かめる
- グループ内で修了課題を読みあいながら、それぞれの視点と文章表現を共有する
- 修了課題の発表・講評を通し、紡ぐ対象や選んだ媒体、タイトルの付け方が適切だったか、内容はどうだったかなどについて振り返り、表現を磨く

講評

**修了課題の発表を受けて、
以下のような観点での講評が行われた。**

- 情報量が多すぎる文章が多い。何を誰に伝えたいのかを明確にして、必要な要素・情報をしっかりと取捨選択した方がいい。
- 伝えたいことが読み手にいちばん伝わる形式になっているか。メディアの特性は理解できているか。仕様によって伝えられることが異なることを自覚する。
- 誰が書いても同じような、ただのレポートやインタビューにならないよう、自分の立ち位置をはっきりさせ、自身の体験をふまえた言葉にする。
- タイトルは本文をふまえた内容になっているか、きちんと検討する。
- 伝えることには責任が伴う。相手が必ずいるのだということを忘れない。

SCHOOL MANAGER

**年間を通して、3名のスクールマネージャーにより
授業のサポートや課題のフィードバックなどを行った。**

阿比留ひろみ
Hiromi Abiru
（一般社団法人ノマドプロダクション）

半年間で受講生の言葉の重み、厚さが明らかに増す。「伝える」に向き合いながら、今わからないことを捨てずに抱えたからこそ見え始めたことがありました。立ち止まる大切さを彼らからも学びました。

猪股春香
Haruka Inomata
（アートマネージャー／春々堂／株式会社ふくしごと）

講座や課題を通して、いかに「自分の言葉として他者に伝えるか」に向き合い続けた受講生の皆さん。漠然とした不安を手放し、徐々に言葉を紡ぐ覚悟を決めていく姿が印象的でした。

関川歩
Ayumi Sekikawa
（Art Bridge Institute 事務局長）

誰かの話に耳を傾け、意見を交わす。一人推敲する時間も大切ですが、授業を終えて「言葉は関係性の中で紡がれるものだと思った」という受講生の振り返りが印象に残りました。

修了

Column　修了課題

授業での学びを生かしながら、アートプロジェクトを言葉で他者に伝えるコンテンツの作成を修了課題とした。スクールマネージャーと相談しながら、どのような方に、どのように届けたいかの設定も行いエントリーシートを作成。プロトタイプの提出、中間提出のプロセスにおいては、エディターからも、構成や文章表現に関して具体的な改善点のアドバイスなども行いながら取り組んだ。これらは受講生の間でも共有し、多様なアプローチや、それぞれにおける技術面での課題を知る機会とした。（教務主任）

修了課題一覧

メイン対象
提出形式

飯島悠介
明日、アートを感じてみませんか？
文化・芸術・アートにあまり関心のない市民・行政職員・議員
レポート

鈴江真由子
無意識の気づきから生まれる世界のひろがり
行政職員
レポート

池田研一
100キロ10日間野宿、ただ「あるく」の作り方
アートプロジェクトの運営や裏側に興味がある人
レポート

中村須美子
アートあれこれ トリセツ（取扱説明書）
～コミュニティアート編～
アートプロジェクトに詳しくないが関心のある一般層
レポート

江坂秀晃
公金を使わずに運営されているアートスペース『The CAVE』を事例に
～表現者の自律的活動を目指して～
補助金や公共文化事業に頼りがちな表現者
レポート

野村佳代
アートプロジェクト一年生の成長日記
アートプロジェクトに詳しくないが関心がある一般層
ウェブサイト

榎村麻子
ある喫茶店マスター（オネエ）と青年のはなし
芸術、文学、ITなどに関心がありそうな人
小説

松原香織
海野貴彦 活動紹介（2012-2015）
アートプロジェクトや海野貴彦の活動に詳しくないが関心のある人
ポートフォリオ

大澤佳那子
ヒツクリコ ガツクリコとことばのこと、アートのことを考えてみた
企画展に興味がある人、実際に訪れた人
レポート

三富章恵
妹よアートプロジェクトはとっても面白いものだからどんなことがあっても行ってみなさい
家族（妹）
フォトブック

木村かおり
いま取手アートプロジェクトで何が起こっているのか終わるもの続くもの生まれるもの
アートプロジェクトの運営者
レポート

武藤祐二
ガイドトークって、鑑賞に役立つ？それともじゃま？
～ 芸術祭のガイドトークにおける、話す側と聞く側の実際とその役割 ～
ガイドトークに興味がある方、ガイドトークに興味を持てない方
レポート

古賀昌美
現代アートを一旦ほどいて紡ぎなおす対話
現代美術の見方がわからないと思っている層
小冊子

室田彩貴
アートプロジェクトを社会に伝えるためのコミュニケーションを考えるときの自問自答シート
アートプロジェクトの運営者
ワークシート

篠崎徳光
数寄調査報告書
アートプロジェクトに詳しくないが関心がある一般層
レポート

山岡依子
ウィズローカル
アーティスト、アート関係者
ウェブサイト

白井希
メディアアートを「知る」KYO-SHITSU
イベントに未参加の方、どんなイベントか知りたい方
パンフレット

山野夏紀
アートプロジェクトを食べる
アートプロジェクトに詳しくないが関心がある一般層
ウェブサイト

受講生インタビュー

Interview

未知のものを魅力的に伝えようと考えることは、未来を創造する力になると思います

01
木村かおり
編集事務

仕事で編集や校正をするようになり、講座でプロのエディターに自分の文章を直していただけることに魅力を感じ受講しました。実際に受講してみて、実体験を文字にする楽しさを学び、また誰に向けた言葉なのかを意識することで読み手の視点を得て、文章に起こす前の対話やコミュニケーションを意識するようになりました。また、課題のためのリサーチとしてアートプロジェクトの第一線で活躍する方々にインタビューをしましたが、彼らの言葉の豊かさにも驚きました。

一言で言い表せない摩訶不思議なアートというものを捉えようともがいた7ヶ月間でしたが、あえて固定せずに揺らいだ未知のものとしたままでも、魅力を伝えられると気づきました。未知のものをいかに魅力的に伝えるかということ。それはアートに限らず、誰かと一緒に未来を創造する力になると思います。アートプロジェクトの魅力を伝えるために学んだ言葉を、今後の表現活動や仕事に生かすだけではなく、より身近にアートに関わり、楽しんで言葉を紡いでいきたいと思っています。

自分の体験を具体的に言葉にすることができるようになり、アウトプットに慣れてきたと感じています

02
白井希
デザイン会社
ディレクター

メディアアートを学ぶイベント「KYO-SHITSU」を5年ほど主催してきましたが、アーカイブを活用して広報活動などにつなげる重要性を実感し、人に伝えられる記録を残したいとの想いから受講しました。
実際に受講してみて、まずは書いてみよう、という体力のようなものを得ることができたと感じています。中でも講座での丁寧な意見交換や、エディターからの専門的なフィードバックはとても勉強になりました。またアートプロジェクトを支える人々のお話を伺うことで、ひとつのプロジェクトを多角的に捉えることができるようになったと思います。受講してみて、「なぜ展覧会に行ったのか」「どのような展覧会だったか」「何が印象に残ったか／残らなかったか」「自分ならどう表現するか」など、具体的に言葉で伝えられるようになったことは、アウトプットに慣れてきた証拠かなと感じています。
次のステップとして、アーカイブを広めたり、助成金を獲得したり、イベントを知っている人を増やしたりと、より実践的に自分の活動を進めていきたいと思います。

社会を捉え、その視点をアートプロジェクトの実践に反映していくゲストたちの姿に感動しました

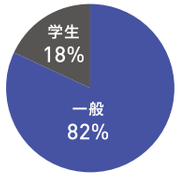
03
三富章恵
アートNPO職員

アートプロジェクトができあがっていく過程を味わう楽しさを、他者に伝えるにはどうすればいいか、また、どう伝えればプロジェクトの魅力に共感してもらえるか、という課題を克服したいという想いから受講を決めました。
多彩な講師陣から聞いたアートプロジェクトの裏側や想いは、非常に刺激になり、彼らが社会をどう捉え、その視点がプロジェクトの実践にどう反映されているのかを知ることができて、純粋に感動しました。
また受講をきっかけに、これまでの自分の経験や考えを整理し、なぜアートプロジェクトの魅力を他者に伝えたいのかを考えることができました。その結果、アートに関わる仕事をしたいと思い、アートNPOに転職を決意するきっかけにもなりました。受講を通じて、魅力を伝える言葉を紡ぐスキルが、即時的にアップしたとは言えないかもしれませんが、伝えることの難しさ、伝える言葉が様々に存在していることなど、多くのヒントを得ることができました。伝える言葉を紡ぐスキルを、これからも磨いていきたいと思っています。

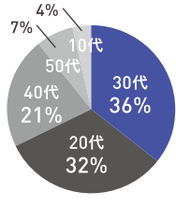
数字で見る「言葉を紡ぐ」受講生データ（2017年度）

受講生数：28名 うち修了人数：18名

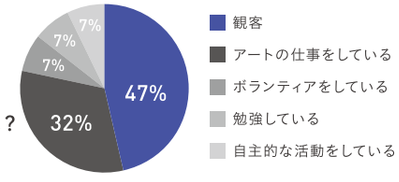
Q1 属性は？



Q2 年齢層は？



Q3 アートとの主な関わり方は？



Course 2

体 験 を 紡 ぐ

アートプロジェクトを
社会とつなぐための体験プログラムの実施や、
メディアの企画立案などに取り組む講座「体験を紡ぐ」。
実践を交えつつ、アートプロジェクトのあり様を多角的に捉え、
社会との接点を提示するための力を養います。

体験を「紡ぐ」ために
必要な視点や技術を養います

「体験を紡ぐ」ためのリサーチ・フィールドワークと演習

Theme 1 紡ぐ意義・アプローチを考える
7月〜8月

アートマネージャー、編集者、アーティストの実践例を通して、アートプロジェクトならではのアプローチで体験を生み出す方法や、その魅力を伝えるための手法について考える。

Theme 2 横浜創造界隈をガイドツアーする
7月〜9月

〈黄金町バザール〉をはじめとする横浜創造界隈におけるアートプロジェクトと地域の関わり方を知り、「言葉を紡ぐ」受講生を対象にしたガイドツアーを企画・実施する。

Theme 3 メディア制作を通して横浜創造界隈を伝える
9月〜1月

ローカルメディア企画・制作手法にヒントを得るなどしながら、横浜創造界隈におけるアートプロジェクトや地域について、紙媒体を通して伝える企画を検討し、制作に取り組む。

Theme 4 自らの興味に応じたテーマで自主企画・調査に取り組む
9月〜1月

それぞれが興味あるテーマとアプローチで「体験を紡ぐ」ために必要なリサーチを進め、グループでの実験を行うなどしながら、その可能性を探り、修了後の活動などに生かす。

Theme 5 プロジェクトの現場で紡ぐアプローチを考える
11月〜12月

〈MOTサテライト 2017秋 むすぶ風景〉のフィールドワークを行い、会場で作品体験を豊かにする企画について考え、プロジェクトの企画者と共にその可能性を検討する。

Theme 6 プロジェクトを振り返る場づくりを考え、実践する
12月〜1月

〈TERATOTERA祭り2017〉のフィールドワークを行い、運営に関わった方々とその体験について語り合うことで共有し、その意義について考える場づくりを行う。

複数の実践経験と検証の機会を提供

4つの実践的アプローチ

ガイドツアー、メディア制作、場づくり、自主企画・調査の実践に取り組み、そのプロセスやフィードバックも共有。

リサーチ・フィールドワークを重視

企画や実践にあたってリサーチ課題に取り組み、積極的にフィールドワークを行うなど最新の現場から情報を収集。

伴走役としてのゲスト・スクマネ

現場経験豊富なゲストによるレクチャーやワークショップ、スクールマネージャー（スクマネ）によるサポート環境を提供。

7/8

ガイダンス

AM

アートプロジェクトを「紡ぐ」

PM

〈混浴温泉世界〉、
〈国東半島芸術祭〉（大分）の体験型ツアー

〈醤の郷+坂手港プロジェクト〉
（瀬戸内）のメディア展開

かじこ（岡山）、たみ（鳥取）の場づくり

GUEST

多田智美
Tomomi Tada
（編集者／株式会社MUESUM代表）

松田雅代
Masayo Matsuda
（NPO法人BEPPU PROJECT
アートプロジェクト事業部 統括）

三宅航太郎
Kotaro Miyake
（うかぶLLC 共同代表）

・アートマネージャー、編集者、アーティストそれぞれの実践例からアートプロジェクトの多様性を知るとともに、「紡ぐ」ことの意義について考える

課題1 **レポート1**（800字）
ゲストの話を聞いて気づいたこと、考えたこと

課題2 **「体験を紡ぐ」メモ1**
これまでに「体験を紡いだ」経験についてまとめる

課題に対するフィードバック

1 理解度をふまえ、ポイントが押さえられていればさらに情報を伝える。不足や誤解があれば補足し、疑問があれば回答例を対話的に伝える

2 「体験を紡ぐ」実践を考えていくにあたり、ヒントになりそうなポイントを確認、共有

7/15

実践例に学ぶ

AM

小金井アートフルアクション
《小金井と私 密かな表現》
における体験の紡ぎ方

※場所：はけの森美術館 カフェ（東京都小金井市）

GUEST

アサダワタル
Wataru Asada
（文化活動家／アーティスト）

荒田詩乃
Shino Arata
（NPO法人アートフル・アクション！スタッフ）

PM

《小金井と私 密かな表現》
を体験するワークショップ

GUEST

アサダワタル
Wataru Asada
（文化活動家／アーティスト）

・アーティスト、アートマネージャー、市民の手により、「紡ぐ」体験を提供しているアートプロジェクトの事例を、現地でのトークとワークショップを通して体感する

課題1 **レポート2**（800字）
「体験を紡ぐ」ということについて、自らの考えをまとめる

課題2 **「体験を紡ぐ」メモ2**
前回の課題のメモを受けて、それをもう一度行う際に心がけたいこと

課題3 **予習**
横浜創造界隈や、横浜で行われているアートプロジェクトなどについての資料に目を通しておく

課題に対するフィードバック

1.2.それぞれにとっての「体験を紡ぐ」がどのようなことなのかを確認、整理し、授業を通して考えていきたいことを対話的に伝える

Column 紡ぐための準備運動

多様な実践例を知る準備運動から授業が始まった。小金井の現場で活動中のアサダワタルさんによるワークショップや、L PACK.さんによるランチタイムを利用しながらの活動紹介は、このコースならでは。授業というより現場そのものに近い体験の後に、その時間を振り返り、受講生自身の手により紡ぐアプローチの可能性を考えることで思考を解した。

スクマネからは、紡ぐ時に意識したいポイントとして価値化・言語化・距離化・体験化・意識化というキーワードを提示。課題では、これまでに受講生が取り組んできた「紡ぐ」体験や、再度取り組むとしたらどのようにすればより深い体験を紡ぐことができるかを考えてもらいながら、授業で学んでいくポイントを共有した。（教務主任）

7/29

実践例に学ぶ

AM

「体験を紡ぐ」仕事と領域を知る

横浜創造界隈とアートプロジェクト

※場所：ノマドプロダクション春日事務所（東京都文京区）

LUNCH

アートプロジェクトの現場で
「コーヒーのある風景」を生み出す

GUEST

L PACK.／エルパック
L PACK.
（アーティストユニット）

PM

市民ガイドによる
まち歩きガイドツアーの心得

GUEST

嶋田昌子
Masako Shimada
（NPO法人横浜シティガイド協会 副会長）

・「体験を紡ぐ」仕事と領域や、横浜創造界隈の基礎的な知識を知る
・ゲストによるレクチャーやワークショップを通して、飲食を伴う活動やツアーで「体験を紡ぐ」実践例とその心構え、基礎的な知識を知る

課題 **ガイドツアーの企画書作成**
9/2に「言葉を紡ぐ」受講生を対象に実施するツアーの内容を着想する

8/19

ガイドツアー演習

AM

黄金町バザール（横浜）における
体験型プログラムの取り組み

※場所：黄金町 高架下スタジオSite-D（神奈川県横浜市）

GUEST

水谷朋代
Tomoyo Mizuya
（認定NPO法人黄金町エリアマネジメントセンター
アートプロジェクトマネージャー／
黄金町BASE 共同設立者）

PM

ペピン結構設計のまち歩き演劇と
クリエイティブ拠点「The CAVE」

歴史的建造物の空間を生かしたインスタレーション「YCC Temporary鬼頭健吾」

横浜のまちづくりと建築スタジオ
「オンデザイン」の仕事の広がり

※場所：The CAVE、泰生ポーチ、
YCC ヨコハマ創造都市センター（神奈川県横浜市）

GUEST

石神夏希
Natsuki Ishigami
（劇作家／ペピン結構設計／
NPO場所と物語 理事長／The CAVE 取締役）

鬼頭健吾
Kengo Kito
（美術家／京都造形芸術大学芸術研究科准教授）

西田司
Osamu Nishida
（建築家／オンデザイン代表）

・「黄金町バザール」において実践されてきた、様々なアプローチによるガイドツアーなどの実践例を知る
・横浜で活動するアーティスト、演出家、建築家などに出会い、それぞれの視点や言葉を知る

課題 **ガイドツアーの企画書改訂**
9/2に「言葉を紡ぐ」受講生を対象に実施するツアーの内容を構想する

ガイドツアー演習

Column 体験を紡ぐ実践（ガイドツアー編）

横浜臨海部や横浜創造界隈の取り組みについての基礎知識をおさえ、〈黄金町バザール〉をはじめとする活動の事例や様々な拠点、人に出会いながら、「言葉を紡ぐ」受講生を対象にしたガイドツアー企画への手掛かりをつかんだ。2人1組で授業外の時間も使いながら企画やリサーチを進め、プラン発表を経てブラッシュアップした5つの内容で実践に取り組んだ。①横浜アートプロジェクトの実践を巡る～寿町と黄金町の奏でるブルース～②こがねちょう のきさきアートツアー ③台湾の作品と対話ツアー ④はけのみち散歩～横浜の土を踏む、川に尋ねる、声と出会う～ ⑤横浜の間（ま）をめぐるツアー　参加者からのフィードバックを受け、振り返りも行うことで手応えや改善点を確認した。（教務主任）

8/26

ガイドツアー演習

AM

ガイドツアー「知り合いを横浜創造界隈に連れて行こう」プラン発表

※場所：Archiship Library&Café（神奈川県横浜市）

GUEST

杉崎栄介
Eisuke Sugizaki
（[公財]横浜市芸術文化振興財団、広報ACYグループ担当リーダー、プログラム・オフィサー）

PM

ガイドツアー実施に向けたリサーチ・フィールドワーク

※場所：Archiship Liberary&Caféほか（神奈川県横浜市）

・横浜に詳しいゲストとスクールマネージャーの視点から、ガイドツアー企画の改善ポイントを確認する
・実際にツアーをシミュレーションしてみる時間を設けて本番に備える

課題　ガイドツアーの概要書作成

9/2に「言葉を紡ぐ」受講生を対象に実施するツアーの内容を具体的に検討する

9/2

ガイドツアー演習

AM

ガイドツアー実施準備

※場所：黄金町 高架下スタジオSite-D（神奈川県横浜市）

PM

ガイドツアー「知り合いを横浜創造界隈に連れて行こう」実践

※場所：黄金町 高架下スタジオSite-Dほか（神奈川県横浜市）

・「言葉を紡ぐ」受講生を対象に2人1組で5つのツアーを実施。自分たちならではの企画にできていたか、企画意図が伝わるように実践できていたかなどを検証

課題1　レポート3（400〜800字）

9/2実施ツアーの振り返りをまとめる

課題2　自己評価シート作成

前回の課題のメモを受けて、それをもう一度行う際に心がけたいこと

課題3　「自主企画・調査」ワークシート作成

自主的に取り組んでいく「体験を紡ぐ」企画のアイデアをまとめる

自主企画・調査

Column　体験を紡ぐ実践（紙メディア編）

ガイドツアー編と同じく、横浜創造界隈とアートプロジェクトを対象としながら、紙媒体を通して伝える企画を検討。影山裕樹さんのレクチャーとワークショップを通して、伝える相手を具体的にイメージしながら媒体の仕様やトーンを考えていく術を学び、それを生かして『ウラヨコ界隈（β版）』というネーミングでフリーペーパーの原稿制作や画像のセレクト作業などに取り組み、編集やデザインのプロセスを学んだ。また、できあがったフリーペーパーを知人に配布しフィードバックを受け、振り返りも行うことで手応えや改善点を確認した。人の興味をひくためにはシンプルにする必要があるが、それでは伝えきれない奥深さをどのように表現するべきかなどが課題となった。（教務主任）

9/23

メディア制作演習　自主企画・調査

AM

紡ぎ方の多様性：場づくりの視点に学ぶ
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
自主企画・調査プラン相談

※場所：ノマドプロダクション春日事務所（東京都文京区）

GUEST

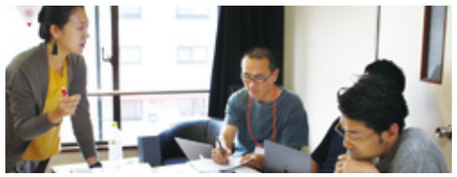
鈴木一郎太
Ichirota Suzuki
（株式会社大と小とレフ取締役）

PM

紡ぎ方の多様性：ローカルメディアの視点に学ぶ

GUEST

影山裕樹
Yuki Kageyama
（編集者／千十一編集室）



・紙媒体やウェブ媒体など、メディアを通してアートプロジェクトを伝えるときに求められる心構えをレクチャーとワークショップを通して身につける
・多様な活動が生まれやすい場のつくり方、様々なアイデアを形にするためのポイントを知る。ゲストから「体験を紡ぐ」企画アイデアへのフィードバックをもらう

課題　「自主企画・調査」ワークシート改訂

自主的に取り組んでいきたい「体験を紡ぐ」企画のアイデアを具体化する

10/14

メディア制作演習　自主企画・調査

AM

「横浜創造界隈を伝える」フリーペーパー制作企画会議
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
自主企画・調査プラン発表

※場所：ノマドプロダクション春日事務所（東京都文京区）

PM

フリーペーパー原稿制作
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
自主企画・調査グループワーク

・ツアーとは異なるアプローチとして、横浜創造界隈やガイドの内容を紙媒体で伝える企画を検討し、制作に取り組む
・自主的に取り組んでいきたい「体験を紡ぐ」企画のアイデアを共有して、グループワークで取り組む準備をする

課題1　「紙媒体で伝える」原稿制作

授業で取り組んだ企画に応じて、担当部分の原稿執筆や写真素材の準備を行う

課題2　「自主企画・調査」企画・リサーチ

授業やフィードバックを受けて、実際に活動に取り掛かるためのリサーチに取り組んだり、企画をまとめる

課題に対するフィードバック

個人面談やメールでのコミュニケーションを通して、受講生それぞれの興味関心・スキルなどに応じた自主企画・調査の企画の方向性や、授業を通して得て欲しいことの整理を行った

メディア制作演習

Column　体験を紡ぐ実践（場づくり：〈MOTサテライト〉編）

ガイドツアー編では今ひとつ踏み込むことができなかった、アートプロジェクトや作品そのものへの理解を深めるような体験について考えることをテーマに実践。清澄白河を舞台にした〈MOTサテライト 2017秋 むすぶ風景〉を3グループに別れてリサーチ・フィールドワークした後に、会場に訪れた観客にどのような体験プログラムが提供できるのかを考え、プロジェクトを企画した学芸員にその内容をプレゼンテーションした。企画の意図や、それぞれの作品がどのようなプロセスを経て完成、展示されているのか。またすでに行なわれている取り組みについても知ることで、企画への理解度や、紡ぐ立場の設定が重要になることを改めて実感する機会となった。（教務主任）

10/28

メディア制作演習　場づくり演習　自主企画・調査

AM

フリーペーパー原稿確認・改訂

※場所：ノマドプロダクション春日事務所（東京都文京区）

PM

自主企画・調査グループワーク

- 紙媒体制作のために準備した原稿の改善点を確認し、ブラッシュアップする
- 自主企画・調査、グループワークで取り組む「場づくり」の企画について方向性や進め方を確認する

課題1　「紙媒体で伝える」原稿制作

最終版の原稿執筆や写真素材の準備を行う。

課題2　「場づくり」リサーチ

対象とする〈MOTサテライト〉やその参加作品について調べておく

11/11

場づくり演習

AM

フィールドワーク〈MOTサテライト〉

※場所：〈MOTサテライト〉開催エリア（東京都江東区）

PM

フィールドワーク〈TERATOTERA祭り〉

※場所：〈TERATOTERA祭り〉開催エリア（東京都三鷹市）

- 〈MOTサテライト〉作品と地域の関わりへの理解を深め、より深く観客に届けるための手法を考える
- 〈TERATOTERA祭り〉をトークイベントという場で紡ぐ視点を探しながら体験する

課題1　〈MOTサテライト〉を紡ぐ企画

作品・プロジェクトをより深く観客に届けるための企画を考える

課題2　〈TERATOTERA祭り〉場づくり企画

作品・プロジェクトをより深く観客に届けるためのトーク企画を考える

12/2

場づくり演習　自主企画・調査

AM

〈MOTサテライト〉を紡ぐ

※場所：ノマドプロダクション春日事務所（東京都文京区）

GUEST

小高日香理
Hikari Odaka
（東京都現代美術館学芸員）

PM

〈TERATOTERA祭り〉を紡ぐ

- リサーチした作品等について、学芸員の話を通し、アーティストの意図を聞くことで理解を深める
- 「体験を紡ぐ」＝体験の質を高める（深める）うえで、作品やアーティストとどう向き合うべきかを考える

課題2　自主企画・調査

自主的に取り組んでいく「体験を紡ぐ」企画のアイデアを具体化する

12/16

自主企画・調査

AM

自主企画・調査中間発表

※場所：ノマドプロダクション春日事務所（東京都文京区）

PM

自主企画・調査中間発表
〈TERATOTERA祭り〉を紡ぐ

- 自らの興味に応じて考えた発表、テスト実施などを行い、多様なアプローチの可能性を共有する

2018.1/6

メディア制作演習　場づくり演習

AM

メディア制作振り返り

PM

〈TERATOTERA祭り〉を紡ぐ場づくりの実践

COMMENTATOR

佐藤李青
Risei Sato
（アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー）

- 紙媒体の制作と、実際にβ版を知人などに配布してみた反応などを踏まえて成果と課題を確認し、よりよい媒体づくりについて考える
- アートプロジェクトにボランティアとして関わった方々と共に、そのアートプロジェクトの魅力について語る場づくり（企画・ファシリテーション）の実践を行う

1/13

実践例に学ぶ　自主企画・調査

AM

〈国東半島芸術祭〉におけるガイドツアー実践

LECTURER

嘉原妙
Tae Yoshihara
（アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー）

PM

自主企画・調査発表と講評／修了式

COMMENTATOR

森司
Tsukasa Mori
（アーツカウンシル東京 Tokyo Art Research Lab ディレクター／東京アートポイント計画 ディレクター）

- 地域の多様な魅力と共にアートプロジェクト体験を提供した〈国東半島芸術祭〉の事例を通してツアーによる紡ぐ手法のポイントを確認する
- 受講生それぞれが取り組んできたい「体験を紡ぐ」自主企画・調査のアプローチの成果を確認、共有する

メディア制作演習
場づくり演習

メディア制作演習
自主企画・調査
場づくり演習

Column　体験を紡ぐ実践（場づくり：〈TERATOTERA祭り〉編）

〈MOTサテライト〉編同様、アートプロジェクトや作品そのものへの理解を深めるような体験について考えることをテーマに実践。三鷹を舞台にした〈TERATOTERA祭り2017〉をリサーチ・フィールドワークし、3日間限定のイベント後に行うトーク形式の場で、どのように体験を深める場づくりが可能かを検討し、実践した。ボランティア「テラッコ」として運営に関わった4名を招き、質問や回答のシミュレーションを行うなどの準備をした上で、当日も受講生自身が担当パートごとにファシリテート。以下の3テーマで対話した。①コミュニティ ②祭り ③政治性（Neo-political）言語化しがたい作品の魅力や、わかりにくい制作プロセスやアーティストの人間性などをテラッコに語ってもらい意見を交わすことで、お互いに理解を深める機会となった。（教務主任）

Column　体験を紡ぐ実践（自主企画・調査編）

ガイドツアー演習後の授業と並行して、受講生それぞれの興味を深めるために「体験を紡ぐ」様々な自主企画や調査に取り組んだ。それぞれのテーマとアプローチを定め、リサーチを中心にした人、実践につなげるための実験をした人、実践と検証を繰り返した人、実施を前提に企画をつくりこんだ人、それぞれに修了後の活動などに生かすための可能性を探った。演習では複数のグループワークにより、共通テーマへの学びを深め、自主企画・調査では個々の取り組み内容を逐次共有しながら進めることで、多様な紡ぐ体験について考える場を提供した。（教務主任）

講評

修了課題の発表を受けて、
以下のような観点での講評が行われた。

・自分が何者で何ができるのかをしっかりと言語化した方がいい。そのことで「体験を紡ぐ」しかけを依頼されるようになるはず。

・すでにある手法や、人材などをうまく使おう。すべてオリジナルにする必要はなく、その方が様々な人に受け止めてもらいやすくなることも多いはず。

・はじめから身構えず、最初は楽しく参加できるようにするなど、続けやすいやり方を考えられるといい。

・最初から完成度を高める必要はない。自らの立場を誠実に伝え、コラボレーターと相談しながら、成長過程として取り組むことのできる企画もあるはず。

・ただ参加する、体験する企画ではなく、自分なりの「紡ぐ」視点を見つけよう。

・紡いだら、紡いでもらう。対話があってこそ成立する企画もある。

SCHOOL MANAGER

年間を通して、2名のスクールマネージャーにより
授業のサポートや課題のフィードバックなどを行った。

坂田太郎
Taro Sakata
(P3 art and environment リサーチャー／サイト・イン・レジデンス)

アートプロジェクトに出会い、ただの傍観者ではいられないという気持ちを、「紡ぐ」という活動につなげてもらえればと思います。

野崎美樹
Miki Nozaki
(SLOW LABELプロジェクトマネージャー／コーディネーター)

私たちは「紡ぐ」という領域に足を踏み入れたばかり。この講座で得た紡ぐ「実感」と「言語化」の体験が、皆さんの新たな実践へのヒントになったらうれしいです。

自主企画・調査一覧

メイン対象
発表形式

岡田千絵
食のある場づくりの企画とその意味を考える
地元の職人と若いアーティスト
企画書+プレゼン

佐藤卓也
音まちの作品と北千住を紡ぐ
新住民である若いファミリー層
企画書+プレゼン

久保田由香
パフォーミングアーツの鑑賞を深める体験を紡ぐ
劇場の観客
企画書+プレゼン

高橋大斗
DOMMUNEをより体験するためのウォーミングアップツアー
父親世代
企画書+プレゼン

林真実
きむらとしろうじんじんの野点（バラエティロード山谷編）を体験してもらうための準備
茶道仲間
企画書＋招待状+プレゼン

峰松智弘
シンプルに紡ぐ
「体験を紡ぐ」受講生
プレゼン

裴潤心
社会的課題をどうアートとして変換し、編集して見せていくか
アートプロジェクトに興味のある方
企画書+プレゼン

山上祐介
THE MUSEUM OF CHIBIHI
「体験を紡ぐ」受講生
レポート+プレゼン

渡邊遥
アートプロジェクトメディア
アートプロジェクトに接点がない人
リサーチ結果とレビュー発表

受講生インタビュー

Interview

01

岡田千絵
財団職員

アートプロジェクトへの自分なりの関わり方を探っていこうと思えるようになりました

受講のきっかけは、仕事で携わる事務局以外でもアートプロジェクトを支える人として関われるかどうか考える時間と、それを試す場の必要性を感じたことでした。仕事では自分がやりたいことだけに関わることは困難です。講座では自分の関心を大切にしながら作品やプロジェクトについて考えることができ、やりがいがありました。経歴や世代も異なる受講生同士の意見交換を通して、セオリーにとらわれていた自分に気づく機会にもなりました。
またゲスト講師たちのアートプロジェクトに関わる様々な姿勢や距離の置き方を見ていると、「自分なりの関わり方」を探っていけばよいという自信につながったと思います。受講したことで、場の大小に関わらず誰を対象に何をするのか、なぜ必要とされているのかを自分の言葉で伝えることを意識するようになりました。
自分の仕事の現場にもつながることですが、言葉にして残すこと、記録することなどを意識して、今後も自分なりにアートプロジェクトに関われる可能性を考えていきたいと思います。

02

佐藤卓也
エンジニア

「体験を紡ぐ」プログラムの受講をきっかけに、本を用いた場づくりを自主的に始めました

「伝える」ことに興味があり、アートと距離を置く人たちにも、アートのよさをわかりやすい言葉に翻訳し、伝えるスキルを身につけたくて受講しました。受講してみて、作品やアーティストと接する際に過程を重視するようになったことで、作品を見る視点に深みと広がりが加わり、より一層楽しめるようになったと感じています。
また、紡ぐという答えのないことを一緒に考えた受講生たちは、世代も様々ですが尊敬できる仲間になりました。
講座の修了後、本を用いた場づくりを自主的に始めました。「体験を紡ぐこと」は、何かとの出会いや言語化する機会をデザインすることと捉えています。思考を物質化した本を媒介として「何か」と出会う場をデザインする。このプロジェクトを通してそんな場をつくり、育てていきたいと思っています。
講座でも取り組んだようなツアーなども、いつか自主的にやってみたいとも思うようになりました。紡ぐことを学び、物事を見るベクトルが他者に向いたからこそ、今までと異なる行動ができるようになったのかもしれません。

03

高橋大斗
大学生

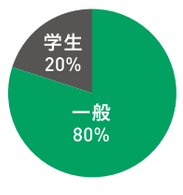
アートと社会の交わりの中に自らの立ち位置を見つけ、どう活動していくべきかがわかりました

アートを介して社会と関わる活動としてのアートプロジェクトの存在を知り、大学での研究と実践の場にしたいと受講を決めました。過去にも連続講座を受講しましたが、今回はツアーや場づくりなどを行うと聞き、現場にいる人と協力しながら自らの学びを深めたいと考えたからです。
講座を通じアートプロジェクトなどに参加してみて、関わってみたいものが増えました。ライブストリーミングサイト「DOMMUNE」のインターンをしており、ファンでもあるのですが、講座でのゲストの講義を受けて、アートプロジェクトのカウンターとして自主的に体験を深める媒体を企画する、プロジェクトを広めるなど、自分なりに伝えられる魅力があると気づくことができました。好きなプロジェクトへの応援や楽しみ方の枠が広がったように感じています。
講座内で行った自主企画・調査で、どのようにプロジェクトを捉えているかが明確になったことも大きかったです。これらの学びや人間関係を今後の勉強や将来の仕事に生かしていきたいと思っています。

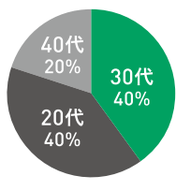
数字で見る「体験を紡ぐ」受講生データ（2017年度）

受講生数：10名 うち修了人数：9名

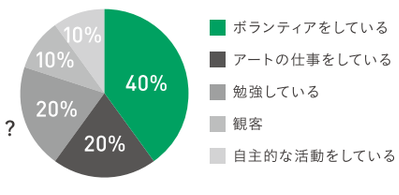
Q1 属性は？



Q2 年齢層は？



Q3 アートとの主な関わり方は？



Course 3

技術を深める

アートプロジェクトを運営する現場で
必要となる技術や知識を身につけるための講座（全4回）。
運営技術や広報やPRに求められる視点、リスクマネジメント、
記録方法などについて、ワーク形式の実践も交え、
現場を動かしている多彩なゲストによるレクチャーを実施しました。

10/3

第1回

アートプロジェクトをはじめるための技術

［アートプロジェクトの運営スキルを身につけよう・事務局ビギナー編］

アートプロジェクト運営に求められる技術や視点について「はじめる」「うごかす」「ふかめる」「のこす」という4つの切り口からレクチャーとワークを通し紐解いた。アートプロジェクトの事務局が、現場の課題と向き合うための手がかりを収録した『アートプロジェクトの現場で使える27の技術』を教材に展開。著者であり、冊子をつくるきっかけとなった講座を担当した3名が登壇。

はじめる　自分の立ち位置の確認、チームづくり、会議の設計、企画の育て方など、活動の土壌づくりに目を向ける

うごかす　リサーチ、企画立案、資金集め、広報計画など、動かし、かたちにするために必要なことを考える

ふかめる　活動の価値や意義を伝える言葉や、対話のあり方、場の設え方など、周囲とのコミュニケーションの精度を上げるためのヒントを探る

のこす　誰に向けて、何のために、何を残すのかを意識しながら、評価や記録の設計について考える

FACILITATOR

坂本有理
Yuri Sakamoto
（アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー）

坂田太郎
Taro Sakata
（P3 art and environment リサーチャー／サイト・イン・レジデンス）

及位友美
Yumi Nozoki
（コーディネーター／株式会社ボイズ／一般社団法人ノマドプロダクション）

EXERCISE

1 自分の現在地をつかむ
これまでのアートやアートプロジェクトとの関わりを書き出し、自分の立ち位置を確認

2 体制図を書いてみる
自分が関与するプロジェクトの体制図を書くことを通して、課題を確認

3 企画書や申請書を読み解く
提案先や申請先が求めていることは何か、企画書や申請書例を読み、ポイントを洗い出す

4 原稿に赤入れする
メールニュースで実際に配信されたプロジェクト紹介記事を例に校正のポイントを確認

11/21

第2回

アートプロジェクトを伝えるための技術

［地域と芸術をつなぐ、広報、PR、コミュニケーション・デザインとは？］

〈奥能登国際芸術祭2017〉を事例に、アートプロジェクトの伝え方について考えた講座。ゲストで同芸術祭コミュニケーションディレクターの福田さんは奥能登における「芸術祭とは？」を自問自答し続けた結果、古きよき日本の貴重な地域価値に敬意を払い、素晴らしさに共鳴する活動と捉え、コミュニティの形成を目指した広報活動を行うことにした。

その結果、「知らせる」から「評判を拡げる」という発想の転換を行うことに。地域価値の維持装置として、芸術祭を継続的に機能させるコミュニケーション活動を展開するという考えに至った。アーティストが制作の過程で発見した珠洲を、自身の言葉で語ってもらうことで、地元住民に芸術祭開催の意義を知ってもらえる上に、芸術祭ファンにもその評判が拡がるのではないか？ という発想のもと、広報ツールとして、フリーペーパー「おくノート」を各家庭を中心に配布。インタビューシリーズ「珠洲を語る」では、アーティストや地元サポーターなど、様々な人の言葉を等価に扱い効果を発揮。

質疑応答で地元の賛否について問われた福田さんは、作品の面白さを共有でき、珠洲に芸術祭が来た誇りを持ってもらえた手応えを感じたと回答。開催地の近隣住民を重要なターゲットと位置づけ、年配の方にもわかりやすく説明していきながら芸術祭を設計した北川フラムさんの戦略がすべてのベースとなっていた。

GUEST

福田敏也
Toshiya Fukuda
（博報堂-Chief Creative X Technology Officer／大阪芸術大学デザイン学科教授／777 Creative Strategies代表取締役／FabCafe LLP. Founder & Creative Director）

COORDINATOR

中田一会
Kazue Nakata
（アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー／コミュニケーション・デザイン担当）

奥能登国際芸術祭公式写真
写真:Naoki Ishikawa　画像提供：奥能登国際芸術祭実行委員会事務局

2018.2/7

第3回

アートプロジェクトのリスクに向き合う技術

関わる人や物事を守るリスクマネジメントとは？

アートプロジェクトを運営する上で考慮すべきリスクマネジメントについて、概論と事例紹介のレクチャー、ワークを通して考えた。概論では、アートプロジェクトに関わるリスクの整理と向き合い方、事例紹介では〈アートアクセスあだち 音まち千住の縁〉における大巻伸嗣《Memorial Rebirth 千住》を事例として取り上げた。

《Memorial Rebirth 千住》は、昨年11月の開催時に100名以上のスタッフが関わり、のべ3000人以上が来場した大きなプロジェクト。実際にどのような人が関わり、企画から実施にいたるまでにどのような共有プロセスを経たのかを丁寧に紐解いた。コンセプトを関係者や地域の人と共有することの大切さや、人と人との信頼関係を築くことの重要性についても触れ、「小さな積み重ねが人やものを守ることにつながっている」という吉田さんの実感のこもった言葉で前半の事例紹介を終えた。後半は架空の企画書をベースに、アートプロジェクトの事務局という設定のもと運営をシュミレーションするグループワークを行った。

EXERCISE

1 リスクの洗い出し
プロジェクトを運営する事務局という設定で架空の企画書を読み込み、起こり得るリスクを洗い出した

2 リスクのマッピング
それぞれのリスクを、影響度と発生確率でマッピングしながら評価し、具体的に予防・発生時対策を検討した

3 知見の共有
各グループで検討した内容を発表。それぞれの視点から見えてきたリスクや対策方法を共有した

GUEST

吉田武司
Takeshi Yoshida
（アートアクセスあだち 音まち千住の縁 事務局長）

FACILITATOR

大内伸輔
Shinsuke Ouchi
（アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー）

橋本誠
Makoto Hashimoto
（アートプロデューサー／一般社団法人 ノマドプロダクション 代表理事）

《Memorial Rebirth 千住 2015 千住市場》の様子

2018.2/21

第4回

アートプロジェクトを記録・アーカイブする技術

写真・映像の記録撮影から保存・活用まで

アートプロジェクトにおける記録・アーカイブをテーマに開催した。ゲスト3名によるレクチャーと、参加者同士のディスカッションをもとにしたワークで構成。まずは須藤さんから、写真・映像を中心にした記録に関わる基礎知識や、撮影の具体的なコツ、データの整理保存などに関するレクチャー。これまでTARLで行ってきたアーカイブ事業の取り組みや参考図書も紹介した。

続いて、2つの現場における実践例を紹介。千葉県松戸市を拠点とする〈PARADISE AIR〉（2013年〜）はこれまでに約100組の国内外のアーティストが滞在制作してきた。大量の記録はオンライン上でメンバー間に共有されている。ソーシャルメディアにおいて積極的に記録を活用していくためのルールや、年度ごとの報告書制作の考え方などが紹介された。

茨城県守谷市に拠点を置く〈アーカスプロジェクト〉(1994年〜) は、若手アーティストの滞在制作支援をメインに、その活動の記録を調査・整備している。25年に渡る活動では、スライドフィルムやフロッピーディスクなど、今では使われなくなった媒体にも記録が残る。現在これらを後世に残そうと、過去の記録の整備事業「アーカスアーカイブプロジェクト」を3カ年計画で実施中。アーカイブの将来的なあり方を考えるきっかけが提供された。

EXERCISE

1 グループディスカッション
現場で抱えている記録に関する課題について、解決のヒントを探るディスカッションを行った

2 知見の共有
各グループで話題になった内容を全体で共有。著作権や肖像権対策、プロセス重視作品の記録方法などの話題が挙がった

GUEST

石井瑞穂
Mizuho Ishii
（アーカスプロジェクト コーディネーター）

金巻勲
Isao Kanemaki
（PARADISE AIRエデュケーター/コーディネーター）

須藤崇規
Takaki Sudo
（映像ディレクター）

FACILITATOR

橋本誠
Makoto Hashimoto
（アートプロデューサー／一般社団法人 ノマドプロダクション 代表理事）

参加者の声

Voice

第1回

- トークがメインの講座とは違い、ワーク中心の講座は積極的に参加できて、新鮮で面白かった
- ワークを通し自分の活動を振り返れただけでなく、他の参加者のことがわかり、自分に足りていない部分もわかった
- アートプロジェクトの事務局を俯瞰して見ることができた。さらに掘り下げて考えてみたい
- 講座で使用した本の内容が充実していた

第2回

- マニュアル本では伝えられないコミュニケーションの価値と役割、意義の再認識と再定義ができた
- 奥能登で初めて芸術祭に触れたが、多様なアプローチや意義、プロセスを聞けてとても有意義だった
- デザイナーとしても得るものが多かった
- 普段働いている広告業界とは全く逆の目線からの話を聞けたことで、自分の仕事について再認識することができた

第3回

- ワークショップの時間がもう少し多いとよかったが、〈音まち千住の縁〉の内容を細かく知ることができたのはうれしかった
- リスクマネジメントだけでなく、〈音まち千住の縁〉について基礎から体系的に学べた点がとてもよかった
- 具体的な内容が書かれたチェックシートなどもあり、大変勉強になった
- リスクについての考え方が整理しやすい説明だった。実際に起きたこととその解決法について、もっと聴く時間があればうれしい

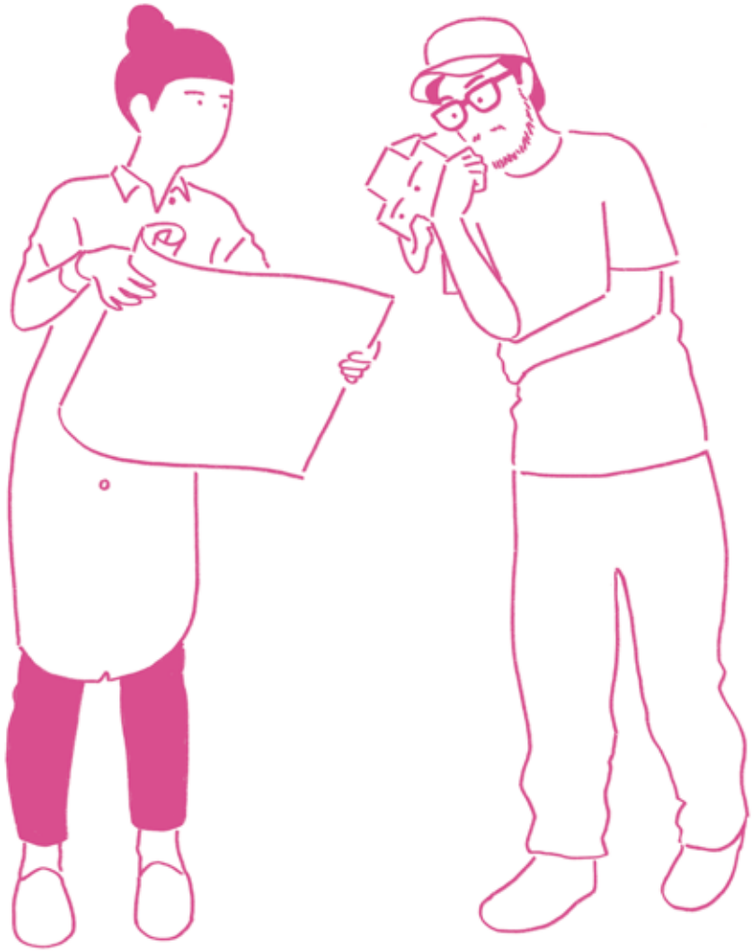
第4回

- 専門的な内容だったが、わかりやすかった。本質的な話だけでなく、具体的な方法論も示してくれたのがありがたかった
- 基本的な記録の技術から、SNSを使った実験的な取り組みまで幅広い記録のあり方をか垣間見ることができた
- トーク+ワークショップの形式だったので、深いところまで学ぶことができた。参加者も多様なので、様々な意見を聞くことができたのがよかった
- アートプロジェクトの現場で実際に「記録」に関わっているものの、これまで持てていなかった技術に目を向けることができた

Course 4

アートプロジェクトの今を共有する

アートプロジェクトの最新事例を知りネットワークを広げる講座（全4回）。
開館したばかりのアートスペースや2017年度に開催された
様々な芸術祭に携わった方などをゲストに迎え
事務局運営の裏側や現場での工夫を伺うほか、
参加者による活動を共有し、ネットワークを広げていく試みも実施しました。



9/15

第1回

これからの文化施設とアートプロジェクト

［まちから得たものをまちへ返す「太田市美術館・図書館」の試み］

周辺街区との連携や市民参加型プロジェクトを積極的に展開する、太田市美術館・図書館を事例にお話を伺った。太田市美術館・図書館は、太田駅周辺の賑わい創出を目的に、まちづくり拠点型の文化交流施設として生まれた施設。建築の基本設計が、建築家と市民によるワークショップを経て、美術館と図書館が複合的に混ざり合うプランが採択されたことに特徴がある。太田市直営の施設として、総合ディレクションをスパイラル/株式会社ワコールアートセンターが、収書支援を紀伊国屋書店が担うかたちで、2017年4月にグランドオープン。

開館記念パフォーマンス「オオタドン」では、太田市の歴史や名物などを盛り込んだ祭唄に乗せ、地元のチアダンスや太極拳のチームなどが、勇壮な踊りや唄を披露した。活動は館内だけにとどまらず、まちなかにも展開。例えば、「まちじゅう図書館」は、所蔵本を手に取った来訪者と館長との触れ合いを生みだす図書館で、現在では41の施設が参加し、賑わいを見せている。

質疑応答では、同施設の近隣に住む参加者から「若い世代が文化に目をけはじめ、太田市の文化再生の兆しが見える」という声も聞かれた。一方で、美術館と図書館の積極的な融合をどう進めるか、地元企業や自治体との連携について、また人材育成など課題もあるということだ。

GUEST

小金沢智
Satoshi Koganezawa
（太田市美術館・図書館学芸員）

COORDINATOR

橋本誠
Makoto Hashimoto
（アートプロデューサー／
一般社団法人ノマドプロダクション 代表理事）

写真：Shinya Kigure+Lo.cul.p

10/12

第2回

集まれアートマネージャー！

［音楽と美術、芸術と生活のあいだの祭典〈札幌国際芸術祭2017〉の試みを紐解く］

〈札幌国際芸術祭2017〉のアートマネジメントの舞台裏を事例にお話を伺った。講座では、「即興性」が話題の中心に。完成形だけを提示してみせるのではなく、人々を巻き込みながら、そこでしかできないことを試みる、音楽家・出品アーティストのテニスコーツの姿勢に、ゲストディレクターの大友良英さんは、芸術祭のテーマ「芸術祭とは何か？」の糸口があるのではないかと考えたという。

その結果、大友さんがこれまでの活動を通じ知り合ったアーティストを巻き込みつつ、「音楽と美術のあいだ」を探りながら、札幌の市民を企画段階から巻き込んでつくりあげられる芸術祭という方向性ができあがっていった。即興性を強めることで、事務局が全貌を把握できない状況も出てきたというが、ルールを決めすぎず、最低限の予算と環境を整えたうえで自由な発想を促すよう努力していった。

この間、事務局はアーティストがジャンルを越境しながら表現する現場を確保した一方で、ボランティアの関わり方において、これまでとは違う工夫をした。運営は運営会社に任せ、ボランティアには、作品展示やイベントのサポートなど事務局からお願いする活動のほか、自分たちでやりたいことを考えるプログラム実施し、4つの主体的な活動が生まれた。その結果、事務局がより現場で起きる即興的な出来事に向き合う時間につながった側面もあったという。また、2014年の芸術祭終了後に立ちあがったSIAFラボは、芸術祭のアーカイブや研究機能としての活動を続けており、次回開催に向けての活動の軸として機能している。

GUEST

細川麻沙美
Asami Hosokawa
（プロジェクト・コーディネーター／
札幌国際芸術祭事務局マネージャー）

COORDINATOR

橋本誠
Makoto Hashimoto
（アートプロデューサー／
一般社団法人ノマドプロダクション 代表理事）

〈札幌国際芸術祭2017〉前夜祭の様子
写真：小牧寿里　提供：札幌国際芸術祭実行委員会

12/22

第3回

EAT&ART TARO《さいはての「キャバレー準備中」》の舞台裏

［食がつなぐアートと地域の次なるかたち］

〈奥能登国際芸術祭2017〉で発表された最新作《さいはての「キャバレー準備中」》の舞台裏を中心に、アートプロジェクトの経緯や仕組みづくり、地元住民の反応や持続的に関わる方法、今後のあり方などについてお話を伺った。

最新作では、元フェリー待合所を「準備中の」キャバレーに変貌させ、評判を呼んだ。フランス発祥の芸術家たちが集ったキャバレーのように、様々な人が集うアートセンターのような作品が誕生。イベントのチケットが数日で完売、1日の最大集客数が1200名に達するなど、大きな反響があった。プロジェクト実現の重要な鍵を握るのは、優秀なスタッフたち。彼らがいてこそ自身が裏方にまわることができ、会期終了後も貸館という形で地元住民に受け継がれることになった（※講座終了後、芸術祭公式サイトで発表）。

話題は、芸術祭主催者からのオーダーにどう向き合うかにも及んだ。地元の問題解決に注力しすぎたり、すべてに応えようとすると作品が魅力や意味を見失うこともあるので、アーティストとしてできることに向き合い、バランスをとりつつ作品を次の次元にジャンプさせることを重視するという。質疑応答で成功の定義を問われると、「今回は、最涯の地にキャバレーをつくれた時点で成功。成功の物差しは様々ですが、プロジェクトを評価してもらえるのはうれしい」と答えが返ってきた。現在TAROさんは、北川フラムさんがオーダーした「革新的な作品」に臨んでいる。

GUEST

EAT&ART TARO
（現代美術アーティスト）

COORDINATOR

橋本誠
Makoto Hashimoto
（アートプロデューサー／
一般社団法人ノマドプロダクション 代表理事）

《さいはての「キャバレー準備中」》展示風景

2018.2/15

第4回

〈ヨコハマ・パラトリエンナーレ 2017〉がつなぐ世界

［栗栖良依が挑む多様性と協働から生まれる表現］

2014年から開催されている〈ヨコハマ・パラトリエンナーレ〉を中心に、活動の変遷や、多様な人々を受け入れるための仕組みづくり、2020年の先のビジョンなどを伺った。

自身の骨肉腫羅患をきっかけに障害者福祉の世界に出会い、現在もディレクターを務めるSLOW LABELの前身となる〈横浜ランデヴープロジェクト〉のディレクターに就任。障害者と企業・職人、アーティストの三者を結ぶ、福祉施設と連携したものづくりなどの活動をスタートさせた。2014年には〈ヨコハマ・パラトリエンナーレ〉の総合ディレクターに就任。身体障害や知覚障害など様々な障害を抱える人を受け入れ、アーティストと協働して表現・創作に挑戦する先駆的なプロジェクトとして注目を集める。当初は「障害のある人が参加したくても参加できない」という物理的・精神的、そして情報面での課題を抱えていた。それを乗り越えるために、2015年からは障害者のバリアを取り除くことにも注力。「アクセスコーディネーター（環境を整える人）」と「アカンパニスト（伴奏する人）」など、芸術活動を支える人材の育成にも取り組んでいる。

企業や個人との技術開発などを進め、2017年には、より多くの人々を多方面から巻き込むプロジェクトへと成長させた。2020年の先に向けて抱くビジョンや、多様な人々が関わることで生まれる新たな表現の可能性について考える機会となった。

GUEST

栗栖良依
Yoshie Kris
（SLOW LABELディレクター）

COORDINATOR

橋本誠
Makoto Hashimoto
（アートプロデューサー／
一般社団法人ノマドプロダクション 代表理事）

参加者の声

Voice

第1回

- 美術館とまちづくりに興味があり参加したが、開館に至るまでの詳しい説明を聞くことができ、さらに視野が広がった
- 各地で誕生する新しい美術館について知りたいと思っていたが、参加してみて、どう考え、どう伝えたいかを考えながら仕事に従事していることがわかり、充実した時間だった
- 魅力的な施設なので面白く聞くことができたし、太田市美術館・図書館ができるまでの工程がよくわかった

第2回

- 普段、音楽関係のアーティストと活動を共にしていないので、即興性をキーワードに、いつもと違う視点からプロジェクトを眺めることができてよかった
- 関連するアートプロジェクトの話を有機的につなぎ、聞くことができたので充実していた
- 基本的な話から、今後の継続についてまで、具体的・多角的に話を聞けたのでよかった
- 〈札幌国際芸術祭〉について、運営内部の事情や率直な考えを聞くことができ勉強になった

第3回

- プロジェクトのキラキラした話だけでなく、裏方の話が聞けたのがよかった
- コミュニケーションが大切とされる今の時代に合っているプロジェクトで興味深かった
- アーティストの柔軟な考え方があるから、作品のアイデアやキレが出るのだとわかって面白かった
- 《さいはての「キャバレー準備中」》制作舞台裏についての話を聞くことで、作品と人や、地域と人とのつながりや、システムを回すコツがわかった

第4回

- 〈ヨコハマ・パラトリエンナーレ2017〉へ3日間通いシゲキを受けました！！生で栗栖さんのお話が伺ってみたかったので、うれしかった。トークの時間が短いくらいに感じられた
- いろいろな方法・幅でトライアルをしていらっしゃること、様々な価値の存在を発見していることを学んだ
- 制作プロセスの中で「考える」「出会う」「気づく」ことを大事にされているということがわかった
- クオリティの高さと、一緒に関わってくれる人の多さが同居できることに驚き、感動した。そしてそれが日々の地道な気づきとトライ&エラーからできあがっていくことがわかり、大変励みになった

紡ぐことへの挑戦

開校して4年目となる「思考と技術と対話の学校」は、アートプロジェクトを「動かす」力を養う講座に加え、「紡ぐ」ことに取り組む講座を開講した。初期3年間力を入れてきた、運営の基礎力づくりのための講座シリーズ（基礎プログラム）に続く新たな展開として、プロジェクトの言語化・価値化、普及・継承に力点を置くこととした。

運営の現場では大抵の場合、「プロジェクトを行う」ことで手一杯になりがちだ。しかし、プロジェクトが成長するためには、プロジェクトを生み、かたちにし、動かすことと同じくらい、プロジェクトを伝え届けることに力を注ぐことが重要となる。そうでないと活動は広がりがたく、価値化もされづらい状況におちいってしまう。とはいえ、予算や時間、人材不足など物理的なことが要因となっていることも多く、現場としては、容易な解決策がすぐに見出せるようなものではないこともある。

一方で、Tokyo Art Research Labと連動してアーツカウンシル東京が展開する東京アートポイント計画事業の活動を通し、運営を支える人材の幅がじわじわと広がりを見せているという実感がある。運営の中核を担う事務局だけではなく、ボランティアメンバー（現在はプレイヤーと呼ぶことも多くなっている）として積極的にプロジェクトに参加する人に加え、様々なプロジェクトとつながり活動や人の輪を広げるような動きが増えてきた。「動かす」だけではなく、活動の価値を広めたり、新たな支援者を巻き込んでいったり、つなげたりするという活動が、運営事務局以外のところでも芽生えている。

運営の現場においては、どうすれば伝える・届けることに、より一層力を入れることができるのか。また、新たな職域や職能として、「紡ぐ活動」を生み出すことはできないだろうか。アートプロジェクトの価値を言語化したり、魅力を伝えたり、鑑賞体験の質を上げることに取り組む人材を育てることはできないだろうか。そんなことをふまえ、今年度より講座の構成を「紡ぐ」人材育成へと拡張することとなった。

今年度の柱として開講した連続講座「言葉を紡ぐ」「体験を紡ぐ」において、重点的に取り組んだのは、言葉にするための素地をつくること。

ふたつの講座で繰り返し考えたのは、どんな立場で、何を、どこに向けて伝えようとするのか。そしてなぜそれをするのか、である。

ここで言う立場とは、大きく分ければ、運営を担う人として言葉を紡ぐのか、運営の外側の人としてなのかということである。いずれかにより携える情報やアプローチも変わってくると言える。さらに突き詰めて行くと、どんな態度や姿勢で、紡ぐ対象と向き合うのか。そして、自分は何者であるのか。そんな根本的な問いにもつながっていく。講座にご登壇いただいたアーティストやアートマネージャー、編集者などゲストの実践的なお話を通して、紡ぐ人は紡ぐなりの覚悟が必要であるということも受講生は感じ取ることとなっただろう。

講座では、グループでの対話を重視し、それぞれがどのようにアートプロジェクトを捉えているのか、どうすれば伝わると考えているのか、そんなことを、繰り返しやりとりしながら、ときには、学校外の全くアートプロジェクトに関わっていない他者の意見も集めながら、紡ぐことについて思考を巡らせた。
「アートプロジェクトとは何なのか。」
「なぜ伝えたいと思うのか。」
「そもそもアートプロジェクトを言葉にするって難しい。」
「伝わらないからはじめたほうがよいのでは。」
「わからないことをわからないと言うことが大事。」
「わかりやすくすることが正しいわけでもない。」
そんなやりとりや投げかけが受講生とスクールマネージャーの間で重ねられながら、講座は展開していった。

紡ぐ方法についても、既存のやり方に捉われることなく、いかに柔軟に考えることができるのか、検討を重ねた。レポート記事や広報物という形態に限らず、物語や絵本をつくるでもよいし、歌ってもよい。落語というアイディアがあがったこともあった。言葉と言っても、書くのか話すのかによっても表現が変化する。それぞれのよさを味わいながら表現方法についても思考した。どうすれば今自分が伝えたいことが、伝えたい相手に届くのか、受講生だけでなく、運営チームも含め皆で必死に想像力を膨らませた。

そもそもアート表現は言語表現と異なる。言葉にしがたいものを言葉にすることには限界があるだろう。伝え方について明解な回答例があるわけではない。けれどもだからこそ、工夫のしがいがあるし、紡ぎ手としてのクリエイションに挑戦する醍醐味がある。様々な現場のストーリーをどのようにすくいとり、手渡して行くことができるのか。そのこと自体を、立場の異なる様々なメンバーと共に、ひとつのテーブルを囲み話し合えるような場の運営を目指した7ヶ月だった。

学校も4年目となると、受講生の層が厚くなり、全国各地での活躍を耳にする機会も増えてきた。アートプロジェクトを「動かす」こと、「紡ぐ」ことを考えながら共に時間を過ごした受講生の皆さんと、またどこかの現場で再会できることを楽しみにしている。

坂本有理
思考と技術と対話の学校　教頭

プロフィール一覧（五十音順）

アサダワタル Wataru Asada

（文化活動家／アーティスト）

言葉と音楽を手がかりに、全国のコミュニティでヘンテコかつ極めて日常生活に近い表現活動を実践・文筆。サウンドメディアプロジェクト「SjQ/SjQ++」ドラマー。大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員、博士（学術）。

阿比留ひろみ Hiromi Abiru

スクールマネージャー

（一般社団法人ノマドプロダクション）

大学卒業後、広告代理店勤務を経て静岡県袋井市月見の里学遊館企画スタッフを務め、ワークショップや講座などを担当。その後、NPOにて子供向けワークショップなどを企画制作。現在は、一般財団法人地域創造・芸術環境部勤務。

荒田詩乃 Shino Arata

（NPO法人アートフル・アクション！スタッフ）

自治体の文化行政担当（2013〜2015年）を経て、NPO法人アートフル・アクションスタッフ（2016年〜）。「小金井と私 秘かな表現」などのプロジェクトの運営に携わる。

石井瑞穂 Mizuho Ishii

（アーカスプロジェクト コーディネーター）

2003〜2004年ポーラ美術振興財団在外研修員。2007〜2008年、アーティスト主導のAIRを運営。2011年アーカイブスタッフを経て、2012年より現職、アーカイブ事業の主担当を務める。近年、「だいちの星座-つくば座・もりや座-」を企画。

石神夏希 Natsuki Ishigami

（劇作家／ペピン結構設計／NPO場所と物語 理事長／The CAVE 取締役）

横浜を拠点に、各地で都市やコミュニティを素材に演劇・アートプロジェクトを手がける。最近の主な仕事として『パラダイス仏生山』（高松、2014〜2016）、クリエイティブ拠点『The CAVE』の立ち上げなど。

猪股春香 Haruka Inomata

スクールマネージャー

（アートマネージャー／春々堂／株式会社ふくしごと）

大学卒業後、大阪で施設管理・運営、舞台公演の企画・制作など、東京でアートプロジェクトのマネージャーを経て、（公財）福岡市文化芸術振興財団でNPO共同企画、人材育成事業などを担当。2016年、企画事務所春々堂を開業。

EAT&ART TARO

（現代美術アーティスト）

飲食店勤務を経てギャラリーでのケータリング、食に関するワークショップから作品制作を行う。これまでに《おにぎりのための、毎週運動会》、《さいはての「キャバレー準備中」》など食をテーマにした作品を多数発表している。

L PACK.／エルパック

（アーティストユニット）

小田桐奨と中嶋哲矢によるユニットとして2007年活動開始。主な活動に廃旅館をまちのシンボルに変換する「竜宮美術旅館」（横浜、2010〜2012年）などがある。2018年1月、日用品店DAILY SUPPLY SSSを横浜にオープン。

大内伸輔 Shinsuke Ouchi

（アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー）

〈取手アートプロジェクト〉のアートマネージャー養成プログラム「TAP塾」でインターン、現在もスタッフとしてかかわる。東京藝術大学音楽環境創造科教育研究助手を経て2009年より現職。

小川希 Nozomu Ogawa

（TERATOTERA ディレクター／Art Center Ongoing 代表）

独自の公募・互選システムで形成したネットワークを基盤に、既存の価値にとらわれない文化の新しい試みを実践し発信する場を目指し、2008年に吉祥寺にArt Center Ongoing 設立。アートプロジェクト〈TERATOTERA〉ディレクター。

小高日香理 Hikari Odaka

（東京都現代美術館学芸員）

主な展覧会として、「ミシェル・ゴンドリーの世界一周」展（2014年）、「オスカー・ニーマイヤー」展（2015年）、「MOTサテライト2017秋 むすぶ風景」（2017年）を担当。

影山裕樹 Yuki Kageyama

（編集者／千十一編集室代表）

雑誌編集部、出版社勤務を経て独立。美術書、カルチャー書の企画・編集、展覧会やイベントの企画・ディレクションなど幅広く活動している。著書に『ローカルメディアのつくりかた』（学芸出版社）など。青山学院女子短期大学非常勤講師。

加治屋健司 Kenji Kajiya

（美術史家／東京大学大学院総合文化研究科准教授）

日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ代表。著書に『アンフォルム化するモダニズム カラーフィールド絵画と20世紀アメリカ文化』（東京大学出版会、近刊）、共著に藤田直哉編『地域アート――美学／制度／日本』（堀之内出版、2016年）。

金巻勲 Isao Kanemaki

（PARADISE AIRエデュケーター/コーディネーター）

映像作家・ダンサーとして活動する傍ら、森美術館ミュージアムショップに勤務。その後もアートイベントなどショップの企画運営に携わる。2016年より現職。ワークショップの企画やドキュメント事業を主に担当。

上條桂子 Keiko Kamijo

エディター

（編集者／ライター）

カルチャー、デザイン、アートについての雑誌編集・執筆、書籍や展覧会図録などの編集も多く手がける。武蔵野美術大学空間演出デザイン学科非常勤講師。近年の編集書籍に、『Act of Love 求愛行動図鑑』（human research、2016年）など。

川瀬一絵 Kazue Kawase

（写真家）

2007年より写真家・池田晶紀の主宰する写真事務所「ゆかい」所属。テーマを定めず衝動的に撮り、それらを編集しながら、衝動の訳を探るような作品づくりをしている。『←（やじるし）』（さいたまトリエンナーレ2016）では、写真撮影を担当。

鬼頭健吾 Kengo Kito

（美術家／京都造形芸術大学芸術研究科准教授）

インスタレーションをはじめ絵画や立体など多様な表現方法を用いた作品を国内外で発表している。近年の主な個展に「Migration」（群馬県立近代美術館、2015年）、「Maltiple Star」（ハラミュージアムアーク、2017年）など。

栗栖良依 Yoshie Kris

（SLOW LABELディレクター）

「日常における非日常」をテーマに新しい価値を創造するプロジェクトを多方面で展開。自身の右下肢機能全廃を機に障害福祉の世界と出会う。2011年、「SLOW LABEL」設立。2014年より現職。ヨコハマ・パラトリエンナーレ総合ディレクター。

小金沢智 Satoshi Koganezawa

（太田市美術館・図書館学芸員）

世田谷美術館非常勤学芸員を経て現職。担当した展覧会に、開館記念展「未来への狼火」、本と美術の展覧会vol.1「絵と言葉のまじわりが物語のはじまり」、太田の美術vol.1「生誕90年 正田壌 芸術は遊びの極致」。

コロカル編集部 colocal

（マガジンハウス）

「ローカルを学ぶ・暮らす・旅する」をテーマに、2012年1月よりスタート。地域の先進的な取り組みや移住者のライフスタイル、ローカルの面白いニュースなどを、取材記事や地域で暮らす人による連載などで日々発信する。

坂田太郎 Taro Sakata

スクールマネージャー

（P3 art and environment リサーチャー／サイト・イン・レジデンス）

P3 art and environment、MeMe Design School、アサヒ・アートスクエア［NPO法人アートNPOリンク］などに関わる。現在はP3でリサーチャーをしながら、「サイト・イン・レジデンス」を継続中。主な役割はサイトにまつわる資料収集と整理。

坂本有理 Yuri Sakamoto

教頭

（アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー）

各地のアートプロジェクトでのボランティア経験などを経て、2008年よりAsia Society（New York）勤務。2010年より現職。東京アートポイント計画の都内アートプログラムの担当に加え、Tokyo Art Research Labの統括を担う。

笹川尚子 Shoko Sasakawa

（特定非営利活動法人 瀬戸内こえびネットワーク）

〈瀬戸内国際芸術祭2010〉からこえび隊に参加し、ハンセン病療養所大島青松園がある大島に関わる。大島とハンセン病の歴史を伝えるガイドツアーの企画などを担当。その後も継続的に大島へ通い、2013年から同職員。

佐藤恵美 Emi Sato

エディター

（編集者／ライター）

「金沢アートプラットホーム2008」（金沢21世紀美術館）プロジェクトスタッフ、（有）入澤企画制作事務所、（株）坂井編集企画事務所、（合）コマンドAなどを経て、現在フリーランス。編集書籍に『アートプロジェクトの現場で使える27の技術』など。

佐藤悠 Yu Sato

（騙り部／ゴロゴロ茣平代表／御噺屋家元／知ったかアート大学学長）

「はなし」「かたり」を主に用い、伝達や記録の不可能性を前提に、自身や他者を騙り直す表現などを行っている。主な活動に、「ゴロゴロ茣平（あざみひら）」、「いちまいばなし」、「知ったかアート大学」などがある。

佐藤李青 Risei Sato

（アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー）

小金井アートフル・アクション！実行委員会事務局長として運営組織と活動拠点の立ち上げを経て、2011年より現職。東京アートポイント計画、Tokyo Art Research Lab研究・開発プログラム、Art Support Tohoku-Tokyoを担当。

嶋田昌子 Masako Shimada

（NPO法人横浜シティガイド協会 副会長）

1992年、横浜シティガイド協会を創立。2011年、第2回「かながわ観光大賞」を協会として受賞。個人では2012年、第61回「横浜文化賞」を受賞。2017年、「男女共同参画貢献賞」受賞。横浜ボランティアガイド協議会会長。

杉崎栄介 Eisuke Sugizaki

（[公財]横浜市芸術文化振興財団、
広報ACYグループ担当リーダー、プログラム・オフィサー）

1999年より現職。芸術文化とまちづくりや産業が交わる現場を担当。主な事業に、アーツコミッション・ヨコハマ助成制度設計・運用、創造都市横浜プロモーション、芸術不動産、関内外OPEN!、地元企業×デザイナーによる商品開発など。

鈴木一郎太 Ichirota Suzuki

（株式会社大と小とレフ取締役）

浜松市のNPO法人クリエイティブサポートレッツにて文化事業を担当。2013年、建築設計から企画・マネジメントまで行う株式会社大と小とレフを共同設立。2016年度より静岡県文化プログラムコーディネーター。

須藤崇規 Takaki Sudo

（映像ディレクター）

映像制作、記録映像のディレクション、ネット配信などパフォーミングアーツに関わる映像全般を手がける。映像プランナーとして多数のカンパニーやプロダクションに参加。映像監督作品に岡田利規『God Blesse Baseball』、チェルフィッチュ『現在地』DVD、『ほうほう堂G留守番』DVDなど。愛知大学非常勤講師。

関川歩 Ayumi Sekikawa

スクールマネージャー

（Art Bridge Institute 事務局長）

2014年、NPO法人Art Bridge Instituteの立ち上げから、機関誌『ART BRIDGE』（2015年〜）共同編集など全般に関わる。2016年、ABI＋P3共同出版プロジェクトスタート。書籍『言葉の宇宙船 わたしたちの本のつくり方』の刊行などに携わる。

多田智美 Tomomi Tada

（編集者／株式会社MUESUM代表）

“出来事の創出からアーカイブまで”をテーマに、文化・福祉・地域などのプロジェクトに伴走し、様々なメディアの企画・編集を手がける。京都造形芸術大学非常勤講師。共著に『小豆島にみる日本の未来のつくりかた』（誠文堂新光社）。

中田一会 Kazue Nakata

（アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー／コミュニケーション・デザイン担当）

IT関連出版社でIR（投資家向け広報）と電子書籍の企画編集を担当。2010〜2015年、株式会社ロフトワークでは企業の広報PR、ブランディング、メディア運営、地域デザインプロジェクトのコミュニケーション設計などを手がけ、2015年より現職。

長島確 Kaku Nagashima

（ドラマトゥルク／翻訳家）

日本におけるドラマトゥルクの草分けとして、様々な演出家・振付家の作品に参加。最近の参加作品・プロジェクトに『←（やじるし）』（さいたまトリエンナーレ2016）、『半七半八（はんしちきどり）』（中野成樹＋フランケンズ、F/T17）など。

西田司 Osamu Nishida

（建築家／オンデザイン代表）

建築分野におけるコミュニケーションの可能性を探っている。主な仕事に「ヨコハマアパートメント」（JIA新人賞、ヴェネチアビエンナーレ日本館招待作品・審査員特別表彰）、「ISHINOMAKI 2.0」（グッドデザイン復興デザイン賞、地域再生大賞特別賞）など。

野崎美樹 Miki Nozaki

スクールマネージャー

（SLOW LABELプロジェクトマネージャー／コーディネーター）

2011年よりアーツ前橋（当時、前橋市 美術館開設準備室）に学芸員として勤務後、川崎市岡本太郎美術館の教育普及担当学芸員を経て、2015年8月より現職。

及位友美 Yumi Nozoki

（コーディネーター／株式会社ボイズ／一般社団法人ノマドプロダクション ）

取手アートプロジェクト事務局、NPO法人アートネットワーク・ジャパンなどを経て、2014年より一般社団法人ノマドプロダクション理事。2015年より株式会社ボイズを設立、横浜を拠点にプロジェクトのコーディネート、編集・執筆などに携わる。

橋本誠 Makoto Hashimoto

教務主任

（アートプロデューサー／一般社団法人ノマドプロダクション 代表理事）

2005年よりフリーのアートプロデューサーとして活動開始。「東京アートポイント計画」の立ち上げなどを担当後、2014年より現職。様々なプロジェクトのプロデュースや企画制作を手がけている。TARL（Tokyo Art Research Lab）事務局。

羽原康恵 Yasue Habara

（アートコーディネーター／
特定非営利活動法人 取手アートプロジェクトオフィス理事・事務局長）

大学院在学中に〈取手アートプロジェクト〉（TAP）のTAP塾にインターンとして関わり、卒業後に2007〜2008年財団法人静岡県文化財団での企画制作を経て、現職。郊外都市での日常型プロジェクトへの転換期を担う。

福田敏也 Toshiya Fukuda

（博報堂-Chief Creative X Technology Officer／大阪芸術大学デザイン学科教授／777 Creative Strategies代表取締役／FabCafe LLP. Founder & Creative Director）

広告コミュニケーションを足場としながら、CI、企業ブランディングから、サービス・事業のコンサル、クリエイティブディレクションまで、「伝える」「伝わる」ことにこだわる幅広い芸風とアウトプットで評価されている。

藤浩志 Hiroshi Fuji

（美術家／秋田公立美術大学大学院教授・副学長）

パプアニューギニア国立芸術学校に勤務した際、原初的表現と文化人類学に出会う。帰国後、土地再開発業者・都市計画事務所勤務。1992年、九州で藤浩志企画制作室を設立。「藤島八十郎をつくる」など、作品を多数制作・発表。

細川麻沙美 Asami Hosokawa

（プロジェクト・コーディネーター／札幌国際芸術祭事務局マネージャー）

テレビ局での展覧会制作・運営を経て、2013年独立。これまでに「スーパーエッシャー展」（Bunkamuraザ・ミュージアム、2006年）、「文化庁メディア芸術祭」（2008年〜）、〈札幌国際芸術祭〉（札幌市、2014年〜）などに関わる。

松田雅代 Masayo Matsuda

（NPO法人BEPPU PROJECT アートプロジェクト事業部 統括）

〈混浴温泉世界〉（2012年、2015年）、〈国東半島芸術祭〉（2014年）をはじめとしたフェスティバルの運営・企画制作や、学校や福祉施設などでのワークショップやイベントの企画・コーディネートなど、ジャンル問わず担当。

水谷朋代 Tomoyo Mizuya

（認定NPO法人黄金町エリアマネジメントセンター
アートプロジェクトマネージャー／黄金町BASE 共同設立者）

2013年度よりNPO法人黄金町エリアマネジメントセンターに所属。プログラムの企画、コーディネーションを行う。2016年「黄金町BASE」共同設立。「黄金町バザール2017 -Double Façade 他者と出会うための複数の方法」キュレーター。

三宅航太郎 Kotaro Miyake

（うかぶLLC 共同代表）

2010年にゲストハウス型のプロジェクト「かじこ」を共同運営。2012年に鳥取に移り、蛇谷りえと「うかぶLLC」を設立。「たみ」、「Y Pub&Hostel」の2つの宿を運営しながら様々な企画を行う。

森司 Tsukasa Mori

校長

（アーツカウンシル東京 Tokyo Art Research Lab ディレクター／
アートポイント計画 ディレクター）

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長。NPOなどと協働したアートプロジェクトの企画運営、人材育成プログラムを手がける。

吉田 武司 Takeshi Yoshida

（アートアクセスあだち 音まち千住の縁 事務局長）

〈北本ビタミン〉（2010〜2012年）や〈三宅島大学〉（2013年）などアートプロジェクトの事務局として企画運営に従事。2014年、アートポイント計画のプログラムオフィサーを経て現職。2016年から埼玉県文化芸術拠点創造事業推進委員。

嘉原 妙 Tae Yoshihara

（アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー）

2010年からNPO法人BEPPU PROJECTにて様々なアートプロジェクトの運営を経験。〈国東半島アートプロジェクト〉（2012年、2013年）、〈国東半島芸術祭〉（2014年）にて作品制作・進行管理や、ツアープログラムの開発などを担当。2015年より現職。

Tokyo Art Research Lab（TARL）とは

Tokyo Art Research Lab（TARL）は、アートプロジェクトを担う全ての人々に開かれ、共につくりあげる学びのプログラムです。人材の育成、現場の課題に応じたスキルの開発、資料の提供やアーカイブなどを通じ、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指しています。活動は、主に下記の3つから成り立っています。

1 思考と技術と対話の学校：講座を通しアートプロジェクトを身体化する
2 研究・開発：現場の課題に応じ新たなスキルの検証・確立を目指す
3 アーカイブセンター：国内を中心とした各地のアートプロジェクトに関する寄贈／収集資料の目録化、一般への開放（閲覧）

WEBサイト

開催講座や、アートプロジェクト関連資料などをご紹介しています。

http://tarl.jp

公開講座の概要をフォトレポートでお届け

TARL公開講座「技術を深める」「アートプロジェクトの今を共有する」フォトレポートを随時掲載。講座に参加できなかった方や振り返りを行いたい方に向け、講座で話されたここだけの旬な内容を写真付きでお届けしています。

資料検索や閲覧ができるアーカイブセンター

アーカイブセンター＋レクチャールーム「ROOM302」のページにて、地域・社会に関わるアートプロジェクトのアーカイブ資料を公開している、アーカイブセンターの開室情報をカレンダーでお知らせしています。
また、サイト「SEARCH302」は、ROOM302が収集する、全国のアートプロジェクトに関する資料を検索できます。

制作物

TARLでは、講座や研究・開発の内容をまとめた冊子などを発行してきました。その一部をご紹介します。

01

02

01:プログラムガイド、アニュアルレポート（2014、2015、2016）

年度ごとの講座の特徴や内容、スケジュール、受講生へのインタビューなどをまとめた学校運営報告書。

02:基礎プログラム1［思考編］「仕事を知る」講義録（2014、2015、2016）

2016年度まで開催していた「基礎プログラム1」（2015年度は「基礎プログラム2」も含む）の講義内容をまとめたもの。アートプロジェクトの運営や地域との関わり方など、多彩なゲストによる事例や経験などが語られている。

03

04

03:思考と技術と対話の学校 基礎プログラム1［思考編］「思考を深める／想像を広げる」講義録（2014、2015、2016）

2016年度までの「基礎プログラム1」の、ゲストによる鼎談をまとめたもの。アートプロジェクトの運営やアーティストから音楽家、研究者、ディレクターなど様々な立ち位置の人々によるレクチャーにふれることができる。

4：基礎プログラム2［技術編］2016 アートプロジェクトの現場で使える27の技術（2016）

アートプロジェクトの始まりから終わりまでのワークフローを学び、業務運営のためのスキルを磨く講座「基礎プログラム2」の内容をまとめた冊子。2017年度の公開講座「技術を深める（第1回）」でも活用。

05

06

05:基礎プログラム3［対話編］2016 プレイパーク・パーティーを考える日（2016）

対話する力を磨く講座「基礎プログラム3」で行われたプレゼンテーション＆トークイベント「プレイパーク・パーティーを考える日」当日の様子と、それに至るまでのプロセスをまとめたドキュメントブック。

06:芸術祭ノート（2016）

港千尋氏による書き下ろし。〈あいちトリエンナーレ2016〉芸術監督の経験をふまえた、その思考と知見をまとめたもの。将来の芸術祭のつくり手たちが、本書を通し、そのあり方／つくり方を議論することを目指し、制作された。

Tokyo Art Research Lab
思考と技術と対話の学校 2017
アニュアルレポート

監修
森司［アーツカウンシル東京］

執筆
坂本有理［アーツカウンシル東京］
阿比留ひろみ、猪股春香、坂田太郎、関川歩、野崎美樹、
及位友美、橋本誠［一般社団法人ノマドプロダクション］

編集
一般社団法人ノマドプロダクション

アートディレクション・デザイン
中北隆介［ツバメヤ合同会社］

イラスト
芦野公平

表紙デザイン
福岡泰隆

写真
加藤健、加藤甫、川瀬一絵

印刷
山田写真製版所

発行
アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス8階
TEL：03-6256-8435　FAX：03-6256-8829
URL：http://www.artscouncil-tokyo.jp

発行日
2018（平成30）年3月23日

TARLの各プログラムについてのお問い合わせ先
TARL事務局（一般社団法人ノマドプロダクション）
E-mail：info@tarl.jp　TEL：080-3171-9724　FAX：03-6740-1926

Tokyo Art Research Lab（TARL）は、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）の人材育成事業として実施しています。また、「東京アートポイント計画」と連携し、相互にフィードバックをしながら展開します。
http://tarl.jp

＊本書は、Tokyo Art Research Lab（TARL）が開校した「思考と技術と対話の学校」
平成29年度プログラムアニュアルレポートとして制作されました。

ARTS COUNCIL TOKYO